

2015年度事業の概要

1 調査と研究	30	国が実施する事業等についての調査・協力	50
飛鳥藤原京の発掘調査	30	●平城宮・京跡の整備	50
平城京の発掘調査	30	●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査	51
企画調整部の研究活動	31	●キトラ古墳に関する調査研究	51
文化遺産部の研究活動	32	現地説明会・見学会	51
●歴史研究室の調査と研究	32	2 研修・指導と教育	52
●建造物研究室の調査と研究	33	文化財担当者研修と指導	52
●景観研究室の調査と研究	33	京都大学（大学院）との連携教育	52
●遺跡整備研究室の調査と研究	33	奈良女子大学（大学院）との連携教育	52
埋蔵文化財センターの研究活動	34	奈良大学への教育協力	52
●保存修復科学研究室の調査と研究	34	3 展示と公開	54
●環境考古学研究室の調査と研究	35	飛鳥資料館の展示	54
●年代学研究室の調査と研究	35	平城宮跡資料館の展示	54
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究	35	解説ボランティア事業	55
国際学術交流	36	図書資料・データベースの公開	55
●中国社会科学院考古研究所との共同調査	36	4 その他	56
●中国河南省文物考古研究院との共同研究	36	刊行物	56
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究	37	人事異動	60
●韓国国立文化財研究所との共同研究	37	予算等	61
●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業	37	職員一覧	62
●ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業	37		
●カンボジアにおける共同研究	38		
●ミャンマー考古・国立博物館局との 技術移転・人材育成事業	38		
●コロンビア大学との研究交流	38		
海外からの主要訪問者一覧	39		
海外からの招へい者一覧	39		
奈文研研究者の海外渡航一覧	39		
公開講演会	42		
特別講演会（東京会場）	42		
第116回公開講演会	43		
第117回公開講演会	43		
研究集会	43		
科学研究費等	44		
学会・研究会等の活動	49		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2015年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で1件、藤原京跡と飛鳥地域で計5件である。また、立会調査は12件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡大極殿院の調査（第186次）は、昨年度につづく藤原宮大極殿院内庭の発掘調査である。内庭の整備・利用状況、および藤原宮の造営過程の解明を目的に、大極殿基壇の南側1548㎡を発掘調査した。調査期間は、2015年4月2日から2016年2月26日までである。

調査の結果、まず藤原宮期の遺構として、大極殿院内庭の礫敷広場と大極殿の南面階段の痕跡を検出した。階段痕跡は、整地土上に据え付けられた凝灰岩切石の最下部を2ヵ所検出した。凸字形の平面形を呈し、その内法幅は推定される大極殿の柱間17尺と一致する。藤原宮の中軸線との関係から、2ヵ所の階段痕跡のうち西側のものは、大極殿中央の柱間に、東側のものは東から2間目に対応するものと推定される。すなわち、今回、検出した階段痕跡は大極殿南面に取り付く中央および東階段の痕跡とみて間違いはない。今回の調査区は、現状の大極殿基壇裾から6m程の距離を置いて設定したが、この階段痕跡の検出により、遺存状況が良好とみてきた大極殿基壇は、南側を大きく削平されていることがあきらかになった。

藤原宮造営期の遺構としては、調査区東側で南北溝、中央で資材運搬用の運河、南側ではその南北溝と運河を結ぶ斜行溝を検出した。南北溝は、朝堂院朝庭において運河を一旦埋め立てた後に、大極殿院南門を迂回するように掘られた幅2.7m、深さ1.1mの素掘溝で、これまでは、大極殿院南門を迂回した後、流れを北向きに変え、そのまま一直線に北流するものと考えられてきた。しかしながら、今回の調査で、南北溝は斜行溝を通じて再び運河に接続していた時期があり、最終的に運河と斜行溝は一体で埋め立てられたことが判明した。これにより、朝堂院で運河が埋め立てられた後も、大極殿院南門の北側では運河の埋め立てが進んでいなかった様子がうかがわれるようになった。宮の造営過程の詳細を復元する上で、重要な所見を得たといえる。

また、昨年度に引き続き、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物や井戸、耕作溝を確認し、宮廃絶後の土地利用の状況もあきらかになった。

藤原京の調査では、本薬師寺寺域の東に隣接する右

京八条二・三坊で発掘調査を実施した（飛鳥藤原第185-7次）。この調査では、西二坊大路の東西両側溝と八条条間路の南側溝を検出し、西二坊大路東側溝と八条条間路南側溝が逆L字状に接続する状況を確認した。また、西二坊大路東側溝の下層では、東側溝の約1.2m西でさらにもう一条の南北溝を検出した。藤原宮や本薬師寺の下層で検出されている、いわゆる先行条坊に関連する遺構の可能性もあり、藤原京の条坊の施工過程を考える上で重要な所見を得た。

飛鳥地域では、奥山廃寺（奥山久米寺）で14年ぶりとなる発掘調査を実施した。調査は小規模なものではあったが、奥山廃寺にともなう整地層を確認した。さらに東面回廊の西側の雨落溝、ないしは基壇外装の抜取溝の可能性のある溝状遺構を検出し、同寺伽藍の復元にむけて新たなデータを蓄積することができた。

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2015年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で2件、平城宮北方遺跡で3件、平城京跡で14件である。また、立会調査は57件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

平城宮では、第一次大極殿院の内庭部（平城第551次）および西面回廊（平城第561次）の調査をおこなった。前者の東区では、奈良時代前半以前の遺構としては土坑状の落ち込みのみ、奈良時代後半以降の遺構としては柱穴2基と斜行溝1条を検出した。下層礫敷を切り込む奈良時代前半の遺構は確認できないため、少なくとも中軸付近には幢旗遺構は存在しないと考えられる。また西区では、奈良時代の方形土坑とⅢ期の東西溝SD7132を検出した。この方形土坑は、1辺2.7mの正方形の平面で、深さ約2.0mの大土坑である。

西面回廊の調査は第一次大極殿院の整備に関連した追加調査で、国土交通省からの受託による発掘調査。ここには第一次大極殿跡に通じる園路があったため、発掘調査がおよんでいなかった。本調査区の北側（平城第436次）と南側（平城第192次）の調査区の発掘成果から予想される位置に、大極殿院内庭部礫敷や一本柱塀の柱穴等を検出した。

平城京内では、平城宮周辺と複数の寺院の調査を実施した。平城京右京一条二坊四坪の調査（平城第546次）は奈良文化財研究所本庁舎の建替にともなうもので、調査面積は1008㎡、調査期間は2015年4月6日

から6月17日までである。今回の調査では、一条南大路の北側溝および西一坊大路西側溝を検出し、その合流地点の様相をあきらかにした。また奈良時代の前半から後半の間に、西一坊大路西側溝の改修のため、一時的に大路上に迂回する溝を設けていたことがあきらかとなり、平城京における条坊側溝の改修方法の一端をうかがい知ることができた。

興福寺境内の発掘調査（平城第559次調査）は、興福寺の「興福寺境内整備基本構想」（1998年）にもとづいた、寺観の復元・整備にともなう調査で、中室・経蔵・鐘楼を対象とした。中室は、規模を確認するため南端と北端を、経蔵は、全容をあきらかにするため全体を、鐘楼は、規模を確認するため西北部と東南部を、それぞれ調査した。調査は2015年10月2日より開始し、2016年1月15日に終了した。調査面積は合計841.5㎡。主な成果としては、経蔵・鐘楼の礎石や基壇外装を検出した。中室・経蔵では、創建当初の建物規模を確認し、再建の際にはその位置や規模を踏襲していることがわかった。また中室は、西室と建物規模はほぼ同一で、柱配置は異なることがわかった。経蔵・鐘楼の周辺では石組溝や玉石敷がみつき、伽藍中枢部における建物周辺の様相について、新たな知見を得ることができた。

平城京朱雀大路跡の発掘調査（平城第552次）は、国土交通省により今後進められる史跡朱雀大路跡等の整備に向けた発掘調査で、朱雀門前における朱雀大路の規模、ならびに平城京右京三条一坊一坪・二坪やその間を通る三条条間北小路の実態をあきらかにすることを目的とした。2015年12月16日から2016年3月30日まで、南北2ヵ所の調査区を設定して調査をおこなった。主な成果としては、朱雀大路の西側溝を北区・南区あわせて計約40mにわたって検出し、朱雀大路の規模は、東西両側溝の心心間で約74mとなることを改めて確認した。また右京三条一坊一坪の南北のほぼ中心を通る東西道路（坪内道路）北側溝を検出した。左京三条一坊一坪でもほぼ同位置で坪内東西道路を検出している。今回検出できたのは北側溝のみであるが、朱雀大路西側溝との接続地点で橋脚を検出したことから、坪内道路が存在したものと推測された。三条条間北小路をなす南北両側溝を検出し、その幅は側溝の心心間で約5.5mあることがわかった。二坪を区画する施設は明確ではないが、二坪東北隅にあたる南区西南部で多量の瓦類が出土したことから、二坪の東辺と北辺は築地塀で区画されていたと推測できた。右京三条一坊一坪の東辺と南辺には、遮蔽施設がない可能性が高いことが判明した。朱雀門前は朱雀大路と

左京・右京の三条一坊一坪を取り込んだ、東西約260m、南北約140mにおよぶ広場的な機能をもつ空間であったとみられる。

このほか、平城京跡では、東大寺東塔院跡（東大寺・奈良県立橿原考古学研究所との共同調査）・西大寺旧境内・薬師寺東塔等で発掘調査をおこなっている。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の設備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に関わる様々な事業についての全体的・総合的な企画との調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を年度ごとの計画にしたがって実施している。2015年度は、専門研修15課程を実施し、延べ171名が受講した。また、研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わないか」のアンケート調査をおこなった結果、100%の者から『思う』の回答を得た。

文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースとして、全国遺跡報告総覧の暫定的な公開をおこなった。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・大判フィルム・35mmスライドフィルム・遺構実測図・遺構カード・発掘調査日誌・軒瓦拓本カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、（1）集団研修「遺跡・遺物の調査と保存」（アジア太平洋諸国から16名参加）、（2）個人研修「遺跡の調査・保存と管理活用」（バヌアツから2名参加）（3）個人研修「写真による文化遺産

の記録とデジタルデータの管理・活用」(ブータンから3名参加)(4)「文化遺産ワークショップ」に講師等を派遣し協力している。

諸外国との国際共同研究としては、中国の社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トプ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、南祠堂の解体修復が完了し、引き続き北祠堂の解体を進めている。このほか、文化庁受託事業によるベトナム・ハノイ林業大学との拠点交流事業において、出土木材の保存に関する共同研究および研究交流を実施した。さらに、東京文化財研究所と共同で実施するミャンマー文化省との拠点交流事業ではビュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡を中心に共同研究をおこなっている。

平城宮跡資料館では、夏のこども展示として「平城京“ごみ”ずかん—ごみは宝—」を開催し、秋期特別展として毎年恒例となった木簡の実物展示として、「地下の正倉院展 造酒司木簡の世界」をおこなった。飛鳥資料館では、春期特別展「はじまりの御仏たち」、夏期企画展 第6回写真コンテスト応募作品展「ひさかたの空—いにしへの飛鳥を想ふ—」を開催し、秋期特別展では「キトラ古墳と天の科学」をおこなった。冬期企画展は恒例となった「飛鳥の考古学2015—飛鳥の古墳調査最前線—」をおこなった。藤原宮跡資料室では、常設展示をおこなうとともに、ロビーにおいて、調査速報展を随時開催した。

写真室では、研究所内の各種写真の撮影や、写真データの保管管理をおこなっている。また、外部からの依頼を受けた写真撮影等もおこなっている。さらに近年では、各地の地方公共団体での埋蔵文化財写真の研修会等に講師として出席している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2015年度は、興福寺・仁和寺・薬師寺・唐招提寺・東大寺や、奈良の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺の調査においては、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、二条家記録第11函～第17函・井坊家記録の調書を作成した。また第109函等の写真撮影を実施した。

仁和寺の調査では、『仁和寺史料 目録編〔稿〕』の続編を公表するための調査として、御経蔵聖教第64函～第74函の調書原本校正・写真撮影を実施した。

薬師寺調査では、第6函～第8函の調書原本校正と、第25函の写真撮影を実施した。また、東京大学史料編纂所の公開研究会「薬師寺中世史料の研究」において、『黒草紙』からみた古代中世の薬師寺」と題する報告をおこなった。

唐招提寺の調査においては、宝蔵・新宝蔵に所在する資料の確認調査・整理作業と、宝蔵第2函～第3函の写真撮影をおこなった。

東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第80函～第85函の調査データ入力、第56函の写真撮影等をおこなった。また、その中に見いだした興福寺僧の明治維新期の日記の調査成果により、興福寺における神仏分離の様相について、雑誌『月刊住職』第498号に「廃仏毀釈 発見された奈良・興福寺僧の日記」として論稿を公表した。

上記の興福寺僧関係資料については、現在もご子孫の元にある個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して、調査を開始した。また、内山永久寺関係の、個人所蔵の資料について調査を実施した。

愛媛県横峰寺が所蔵する資料について、原本調査の成果を『奈良文化財研究所紀要2015』に、「石鎚山の縁起からみた蔵王権現信仰」として公表した。奈良の大峯山の信仰が、四国の石鎚山や鳥取県の三徳山に伝播した状況がうかがえた。また三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第5函～第6函、経典等の調書を作成し、歴史資料の写真撮影を実施した。

そのほか、調査協力の依頼を受けて、石山寺調査、文化庁依頼の仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2015年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した、昭和修理に際し、再用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、当研究所が部材の実測、写真撮影等をおこない、図化をおこなった。引き続き2016年度も調査をおこなう予定である。

受託調査として、秋田県横手市増田伝統的建造物群保存地区に所在する町家の詳細調査、山梨県富士吉田市に所在する北口本宮富士浅間神社の社殿詳細調査、鳥取県若桜町若桜地区の伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。

前年度からおこなっている横手市増田の町家調査は、保存地区の中心部にある松浦千代松家、佐藤又六家という、文化財的な価値が高いと目されていた2件の町家について、建築年代や建築後の変遷を調査してあきらかにし、報告書を刊行した。

北口本宮富士浅間神社の社殿調査は2015年度単年度の事業である。本殿3棟がすでに重要文化財に指定されているが、宝永の富士山噴火後の18世紀中頃に建築された拝殿、随神門をはじめとする富士講信者の寄進による社殿13棟は県指定または市指定の有形文化財である。これらの社殿を近世社寺建築としての評価軸から詳細調査をおこない報告書を刊行した。

鳥取県若桜町の伝統的建造物群保存対策調査は2015年度から2カ年計画でおこなう調査の初年度で、伝統的建造物の所在を確認する1次調査、各伝統的建造物のやや詳細な調査をおこなう2次調査、水路や樹木等の環境物件、工作物調査等をおこなった。2016年度に調査を完了し報告書を刊行する予定である。

調査研究の一環として、当研究所保管資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化を継続しておこなっている。

このほか、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業・史跡整備事業にともなう建造物復原等につ

いて援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、「文化的景観」を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。特に2011年度からは諸外国との比較検討を視野に入れながら、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めてきた。また、文化的景観の具体的事例に関する取組としては、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について継続的に検討を重ねている。

2012年度後半からは、従前の取組成果をふまえて、文化的景観の定着と保存・活用の促進等をはかるため、外部の専門家・実務者を含む『「文化的景観学」検討会』を編成し、広い視野から文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等の体系化に向けた検討を深めてきた。2015年度は6回の検討会を開催し、これまでの成果をまとめ、『地域のみかた—文化的景観学のすすめ—』として出版した。

文化的景観研究集会（第7回）を「営みの基盤—生態学からの文化的景観再考—」をテーマとして11月28～29日に開催した。参加者は約90名であった。

基礎的情報の収集等については、2010年4月から2015年10月に選定されたすべての重要文化的景観について、各選定事例の保存計画等の収集・整理および分析をおこなった。その成果を文化的景観資料集成としてまとめ、『文化的景観保存計画の概要（Ⅱ）』（2010～2012年の選定を収録）『同（Ⅲ）』（2013～2015年の選定を収録）を出版した。その一部は当研究所のウェブサイトにも公開した。また、諸外国との比較検討の観点から、世界遺産に登録された文化的景観の基礎的情報を収集し、同書に収録した。

個別の文化的景観の調査・計画等に関しては、京都市の文化的景観について、京都市から受託して市域の調査等をおこない、「京都岡崎の文化的景観」の重要文化的景観選定記念事業の協力等をおこなった。また、重要文化的景観「宇治の文化的景観」（宇治市）、同「四万十川流域の文化的景観」（四万十市）の整備計画策定のほか、「阿蘇の文化的景観」（熊本県）、「宇治茶生産の文化的景観」（京都府南部）の調査等に協力した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備については国際的な動向も視野に入れ

ながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査をおこなっている。

2015年度は、前年度おこなった遺跡整備の研究集会の報告書を刊行し、「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」をテーマとして遺跡整備活用研究集会を開催した。近年、文化庁の補助金等も利用してタブレット端末やスマートフォン用の、遺跡を活用するためのアプリケーションの開発が多くなってきている。研究集会の前に都道府県を通じて全国の自治体にアンケート調査をおこない、全国の遺跡等でのアプリケーションの導入状況を把握した。研究集会では平城宮跡第二次大極殿跡等でアプリのデモンストレーションをおこなった上で、各報告と討議により、日進月歩の技術革新の中、デジタルコンテンツを用いた遺跡のプレゼンテーション技術について現状と課題を共有することができた。

遺跡整備事例研究会として中国の唐長安城大明宮跡、隋唐洛陽城跡の発掘調査と整備の担当者を招聘し、2010年から始まった国家考古遺跡公園の事例を報告していただいた。国家考古遺跡公園は都市公園の種類ではなく、国家文物局が認定する称号であり、大々的な整備を各地でおこなっている。また、福岡県の史跡整備担当者を招き、県内の最新事例に関する情報収集をおこなった。

キトラ古墳の整備工事の中で墳丘の形状や背面カットの表現等の指導と、乾拓板の活用方法の提案等、実践的な整備と活用に関する研究をおこなった。

庭園に関しては2011年度から中世庭園の研究会を開催してきたが、4か年分の成果を研究論集『中世庭園の研究』として刊行した。また、奈良市教育委員会と進めている「奈良市における庭園の悉皆的調査」については町屋の庭や東大寺の塔頭の庭等の現地調査をおこなった。

その他、コロンビア大学との研究交流事業では、これまでの米国での発表内容を論文集として刊行した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づき専門的な助言や協力をおこなっている。2015年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1) 出土遺物等の材質構造調査、埋蔵環境調査および保存処理法の開発研究、2) 遺構の安定化法に関する基礎研究、3) 文化財の非破壊材質構造調査法としてのミリ波およびテラヘルツ波の応用研究を実施している。

1) では①標準試料ならびに顔料、ガラス製品、石製品、紙資料のラマンスペクトルの取得、②出土モザイク玉のX線CT法による製作技法の解明、③青森県御所野遺跡出土遺物付着黒色物質（アスファルト）の同定、④古墳石室内埋蔵環境の金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。また「出土木製遺物の保存に関する最近の動向」をテーマとした研究集会を開催した。2) では①露出展示遺構の保存のための土中と覆屋内空気における熱、水分および酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析、②装飾古墳石室内温熱環境に及ぼす封土の状態および墳丘表面の被覆状況の影響の検討、③熱水分移動解析による磨崖仏の内部および露頭における塩析出の要因の検討、をおこなった。3) では、新規導入したテラヘルツ波イメージング装置による試験測定と文化財資料の測定、ならびに標準資料のテラヘルツ標準スペクトルの収集をおこなった。

受託事業として、喜界町出土金属製遺物の保存処理（喜界町）、群馬県金井東裏遺跡出土ガラス製遺物の材質・構造調査（群馬県）、国史跡田熊石畑遺跡墓域整備にともなう埋蔵環境下での金属製遺物の腐食に関する研究（宗像市）、国宝薬師寺東塔顔料等分析調査業務（奈良県）、国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討および墳丘復元法検討業務（日田市）、神明遺跡出土銅鐸に関する保存科学的研究（岡山県）、愛知県美術館所蔵作品のテラヘルツイメージングによる診断調査（愛知県美術館）、平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業（文化庁）、ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業（文化庁）の9件を実施した。連携研究として、クスノキ製白保存処理に関する保存科学的研究（大分市）、松平忠雄墓出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）の2件を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）において、壁画の劣化原因究明および修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

2015年度も東日本大震災の復興事業にともなう発掘調査や整理作業に対する支援を継続的におこなった。波怒棄館遺跡（宮城県）では、昨年度に引き続き分析を進め、縄文時代前～中期における約15,000点の動物遺存体を同定した。出土した動物遺存体は、ほとんどが貝類と魚類で、とくに哺乳類が非常に少ないことが特徴といえる。貝類はイガイ、ムラサキインコ、スガイといった岩礁域に生息するものを中心として、砂泥底に生息するアサリ等が混じる組成であった。魚類はマグロ属、カツオといった回遊魚と沿岸に生息するマダイやアイナメ属等が非常に多く含まれていた。石器や骨角器が嵌入したマグロ属の椎骨が出土しており、刺突を受けたような痕跡が残された椎骨も見つかっている。マグロ属の獲得や利用の実態があきらかになる貴重な資料といえる。

復興関連以外では、金井東裏遺跡（群馬県）、保美貝塚（愛知県）、藤原宮跡、興福寺（以上、奈良県）、東名遺跡（佐賀県）等の遺跡から出土した動物遺存体や骨角製品を分析して、発掘調査報告書を執筆した。また、藤原宮跡大極殿院、平城宮跡東院地区、平城京跡右京一条二坊四坪、西大寺旧境内で、古環境復原の調査をおこなった。

研究成果の発信として、日本動物考古学会、日本人類学会、生き物文化誌学会等の学会で研究発表をおこなった。社会還元や普及事業では、復興調査支援の一環として、有機質遺物の現場マニュアル『現場のための環境考古学（携帯版）』を作成し、岩手県、宮城県、福島県に配布した。また『北米北西海岸の低湿地遺跡からみた植物利用・景観復元・海水準変動』と題して、海外研究者を招いた講演会を開催した。

現生標本の収集と公開では、ウシサワラといった貴重な標本作製するとともに、貝類目録を作成して刊行した。遺跡から出土することの多い哺乳類（ヒト、イヌ、イノシシ、ニホンジカ、ウシ、ウマ）の主要骨格部位について、三次元計測による立体的な骨格図譜を奈良文化財研究所のウェブページで公開した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学・建築史学・美術史学・歴史学等、文化財に関わる諸分野に資するべく、木製文化財の年輪年代学に関する調査・研究をおこなっている。対象は、出土遺物、建造物、美術工芸品等多岐

にわたり、これらの年輪年代調査を実施するとともに、調査手法の研究開発にも取り組んでいる。当研究所で開発したマイクロフォーカスX線CTやデジタル画像による調査手法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡大と活用を図っている。また、標準年輪曲線の拡充による木製文化財の産地推定等、年輪年代学に関する基礎研究のほか、年輪年代調査への適用の可否を判断するため樹種同定調査もおこなっている。

このうち建造物の調査では、宝城坊（神奈川県伊勢原市）の厨子（重文）の年輪年代調査を2008年から継続的に実施し、本堂（重文）の解体修理を記念して厨子内に安置されていた薬師三尊像が2015年夏に神奈川県立金沢文庫に特別出陳されたのを機に厨子内部を詳細に調査する機会を得、一連の調査を完了した。その結果、複数の壁板から辺材を十分に残すものが確認され、それらの最新の年輪年代は1230年であった。鎌倉時代前半のこの年代は、禅宗様の意匠を取り入れた厨子としては勿論のこと建築としても最古のものであり、禅宗様建築の成立を考究する上で貴重な建築であることを実証した。

このほかに2015年度は、年輪年代学用木材標本の整理を重点的におこない、現生木材標本についてリストを公表した。年輪年代学では、年輪が形成された年代を誤差なくあきらかにすることができるが、そのためには年輪の形成された年が明確な現生木から遡った年輪変動のデータを蓄積する必要がある。そのため研究室では、文化財ではなく自然史標本の範疇に入るとも言える年輪年代学用の各種木材標本を多数、収集してきた。この標本群は、我が国において年輪年代学の応用が成された根拠を示す証拠としての役割を担い、再現性を保証する重要なものであると同時に、昨今の森林事情を考えると現在では入手困難なものも多いため、本標本群を収蔵し、リストを公開する意義は大きい。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡研究、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

2015年度は、遺跡およびその調査法業務では、古代の寺院と官衙関連遺跡、井戸遺構資料の収集・整理を継続し、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこない、新た

に8,000件以上のデータを入力・補訂した。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、主な遺構と遺物、建物等の詳細と、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像について、新たに6,000件以上のデータを奈良文化財研究所のホームページ上で追加公開している。また、都城発掘調査部と共同で、古代官衙・集落研究会の報告書『官衙・集落と土器1』（奈文研研究報告第15冊）と第19回研究会資料集「宮都・官衙と土器」（官衙・集落と土器2）を作成した。また、前年度に開始した、科学技術・学術審議会の建議「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」にもとづく、「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業を継続している。2015年度も発掘調査報告書および発掘調査現場での災害痕跡情報の収集・整理・分析をおこない、エクセル等へのデータ入力を実施、データは約12,000件に達した。さらにGISデータベースの開発に着手、データを一部ダウンロードし、パイロット版の運用に向けた動作確認等をおこなった。

いっぽう、文化財の調査技術業務では、計測・測量、探査の各分野を中心に活動をおこなった。計測・測量分野では、三次元レーザースキャナーやSfM/MVS、小型UAV等を用いた文化財計測手法・システムについての研究をおこない、実用化に向けた開発を進めた。SfM/MVSの利用については研究会を開催し、66名の参加者を得た。また、各地の地方公共団体や大学等と連携して、薬師寺東塔・東大寺・平城京跡（以上、奈良県）、大坂城真田丸推定地（大阪府）、金沢城（石川県）、船塚古墳（千葉県）等、現地で遺構計測を実施するとともに、前年度までに収集した東日本大震災復興関連調査等のデータ解析・報告書作成をおこなった。探査分野では、遺跡の状況に応じた柔軟な走査方法について検討し、また、アレイ式地中レーダー機器の開発をおこない、平城宮跡や大坂城等で試験的な探査を実施した。ほかに、発掘調査記録の標準化と効率化のための色彩計測方法の検討をおこなった。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ベトナムやミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこ

なういっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国社会科学院考古研究所との共同調査

2015年度は昨年度に引き続き、北魏洛陽城宮城の発掘調査の出土品の調査を実施した。6月に今井晃樹（都城発掘調査部）、栗山雅夫（企画調整部）の2名を洛陽に派遣し、出土遺物の整理、実測、写真撮影をおこない、現地では遺物の分類の方法や遺物の時期、遺構の変遷等を中国側の研究者と議論した。帰国後は、調査資料の整理や分析等を継続しておこなっている。

12月には、渡辺晃宏都城発掘調査部副部長と今井晃樹の2名が北京の社会科学院考古研究所に赴き、中国側の白雲翔副所長、朱岩石漢唐研究室主任とともに、新たな共同研究についての現況と今後の具体的な実施方法について協議した。新たな共同発掘については中国政府の許可がおりず、今後も中国の関係省庁と協議しながら進めていくこととした。また、双方の研究所間での学術交流を深めていくことを確認し、来年度以降、どのような形で進めていくかについて検討していく予定である。

2016年1月には来日中の銭国祥洛陽工作站長を招へいし、2010年度の日中共同発掘終了後、この数年の間に中国側が実施した北魏洛陽宮城太極殿等の発掘調査成果について報告会を開催した。会には多くの所員が参加し、成果報告について討論をおこなった。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015年3月19日締結の「友好共同研究議定書」第4条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。現在は両窯址出土品の整理、調査研究を共同で継続して実施してきており、双方での報告書刊行にむけての作業を進めている。

2015年度は共同研究第Ⅳ期5カ年計画の1年目にあたり、2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市・黄冶窯址出土資料の整理と、2005年から2007年にかけての鞏義市・白河窯址出土資料の整理作業を進めるとともに、黄冶窯址の報告書（中国語版）の刊行にむけての作業をおこなった。あわせて、同報告書の日本語版の刊行にむけての作業を並行しておこない、河南省における唐三彩関連資料の調査も実施した。2015年度における河南省との共同研究にかかる相互の交流は、下記のとおりである。

2015年11月16日から11月20日まで、河南省文物

考古研究院は5名の研究者（楊文勝・張慧明・趙志文・李一丕・郭洋）を派遣し、奈文研を訪れ学術交流をおこない、関連資料の見学をおこなった。また、2015年11月30日から12月3日まで、奈文研は尾野善裕、森川実、丹羽崇史（都城発掘調査部）の3名を河南省に派遣し、報告書編集者との協議をおこなうなかで、発掘調査報告書『鞏義黄冶窯』中国語版の刊行にむけての進捗状況を確認し、相互の調整をはかるとともに、日本語版の刊行に関する打合せ等をおこなった。このほか、河南省における唐三彩関連資料の調査を実施した。

●中国遼寧省文物古研究所との共同研究

2015年度の遼寧省文物考古研究所との共同研究は、5カ年計画で開始した「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の5年目である。

研究交流活動として、11月24日から27日の4日間、中国遼寧省文物考古研究所を訪問し、25日に同所において日中合同研究会を開催した。発表者は、奈良文化財研究所の清野孝之・廣瀬覚・諫早直人・大谷育恵、遼寧省文物考古研究所の李新全・万欣・万雄飛・郭明・王宇・李霞、中国社会科学院考古研究所の王飛峰の合わせて11名である。

清野孝之は「遼寧省北票市金嶺寺遺跡出土瓦の調査」、廣瀬覚は「北票大板営子墓地の造営過程と親族構造についての予察」、諫早直人は「三燕の金工品と倭の金工品」、大谷育恵は「遼寧省で出土した貴石象嵌指輪とその位置づけ」についてそれぞれ報告した。中国側は、李新全の「三燕文化図案瓦当源流考」、万欣の「遼寧北票市喇嘛洞墓地IM17鉄甲堆積室内整理簡報」、万雄飛の「三燕竜城宮城南門遺址発掘主要収獲」、郭明の「喇嘛洞墓地出土銅人面飾再考察」、王宇・李霞の「大板営子墓地出土陶器相関問題研究」、王飛峰の「三燕、高句麗蓮華文瓦当の出現と関係」である。

研究会は李新全書記と李竜彬副所長が進行し、会の最後に郭大順名誉所長から御講評をいただいた。その中で、日本側の詳細な観察にもとづく研究報告が高く評価され、今後もこのような合同研究会を開催し、日中の学術交流をはかるべきであるとのお考えが示された。

翌26日は、呉炎亮所長・李新全書記・李竜彬副所長・李霞副主任と、この5か年間の共同研究の成果として、日中合同研究会の発表にもとづいた報告書を刊行するための協議を実施、日本語版・中国語版それぞれを分担して編集・出版することで合意した。

このほかに、年度末の3月21日～25日には遼寧省文物考古研究所員4名を招聘し、学術交流を深めた。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

当研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協約書を締結し、共同研究を実施してきた。2015年度はその第3期の最終年度となる5年目にあたり、協約にもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき実施した研究の成果として、日韓合わせて17名の研究者が14本の論考を執筆し、『日韓文化財論集Ⅲ』として刊行した。

発掘調査交流では当研究所より国立慶州文化財研究所へ研究員1名を派遣し、新羅王京遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約2ヶ月であった。また当研究所において国立慶州文化財研究所から研究員1名を受け入れ、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区、平城地区）において共同調査を実施した。受け入れ期間は約2ヶ月であった。期間中には、相互の派遣・受け入れ先において研究報告会をおこなった。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

2003年度からアフガニスタン、イラクおよび周辺諸国の文化遺産保存修復に関わる事業として東京文化財研究所と共同で実施してきているが、近年は中央アジア諸国の調査への協力が中心となってきている。2015年度は、6月13・14日に名古屋大学で開催された日本西アジア考古学会に出席、7月22日に東文研で開催されたパーミヤーン大仏再建に関する研究会に出席した。シルクロード関連遺産として世界遺産に登録されているキルギスのアク・ベシム遺跡で、東文研がおこなった発掘調査に研究員1名が10月25日から31日の間参加した。今後ともシルクロード全般に関する資料収集を続けていく必要がある。

●ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業

本事業は、ベトナム林業大学および京都大学生存圏研究所と共同で、広く東南アジア地域を対象に、出土木製品の保存処理に関する技術移転をおこない、出土木製遺物の調査および保存に関する東南アジア地域の人材育成に資することを目的とする。2015年度は、1) 東南アジア地域における出土木製品調査、2) ベトナム出土木製遺物の保存処理に係る実験、3) 出土木材保存に関する国際ワークショップの3つの項目を

実施した。1)では、ベトナム林業大学のスタッフとともにカンボジアとラオスにおいて出土木製品の調査をおこなうとともに出土木製遺物の保存に関する研究会をおこなった。2)では、京都大学生存圏研究所において、ベトナムからの留学生を受け入れ、保存処理に資するためのベトナム産現生木材およびタンロン遺跡等から出土した木製遺物の構造的、化学的および物理的性質を調査研究した。3)では、京都大学生存圏研究所木質ホールにおいて、ベトナム、タイ、カンボジア、ラオスおよびインドネシアより出土木製遺物に関する専門家を招へいし、国際ワークショップを開催した。拠点交流事業の最終年度にあたり、ベトナム林業大学に出土木製品の保存に関する研究拠点ならびに東南アジア各国の専門家とのネットワークを形成することができた。

●カンボジアにおける共同研究

カンボジアとの共同研究では、2002年から対象遺跡をアンコールトム内の西トップ遺跡に定め調査研究をおこなってきた。その後、遺跡の状態が不安定になってきたため、2013年からは調査修復活動をおこなってきた。2013年にまず南祠堂の解体修復から着手し、2015年度には再構築に入った。再構築は順調に推移し、当該年度12月には南祠堂再構築を終了した。その後、すぐに北祠堂の解体にはいり、現在、上成基壇の解体が終了した。今後、下成基壇の発掘調査をおこない、さらに解体を進め、2016年度内に再構築を終了する予定である。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

2015年度は、前年度に引き続き東京文化財研究所が受託した拠点交流事業の内、考古分野に関して再委託を受けた。11月18日から26日に研究員3名を派遣し、ピイの考古学フィールドスクールおよびシュリクシェトラ遺跡において遺跡整備に関するワークショップを開催した。受講者はスクールの講師を中心に計12名である。遺跡のゾーニング案を研修生が地図の上を示す実習は理解を深めるのに有効であった。また、2月16日から21日に2名を招へいし、奈良文化財研究所において遺跡整備に関して講義をおこなうとともに、整備現場として平城宮跡、難波宮跡、三内丸山遺跡等を見学した。

●コロンビア大学との研究交流

アメリカ合衆国ニューヨーク市所在のコロンビア大

学中世日本研究所および建築・計画・保存大学院と交わした研究協力および交流に関する覚書にもとづき、2011年4月1日から5年間にわたり、研究者の交流等をおこなった。最終年度となる2015年度は、2011～2014年にコロンビア大学においておこなった9本の研究発表を英文の論文集にまとめ、『Lectures from the International Research Exchange between Nara National Research Institute for Cultural Properties and Columbia University, 2011 - 2015 (奈良文化財研究所とコロンビア大学との研究交流事業における研究発表論文集)』として刊行した。

海外からの主要訪問者一覧

- スイス／ベルン州・首相 バーバラ・エッガー＝イエンツァー 他4名／'15.4.17／遺構展示館、第一次大極殿見学
- 韓国／文化財庁企画調整官・局長 朴英根 他3名／'15.5.20／文化遺産管理体系等実態調査
- ミャンマー／ホテル観光省 観光促進・国際交流部長 Khin Than Win 他9名／'15.9.30／JICA研修の一貫として、平城宮跡の維持保存について視察
- 韓国／ソウル市文化本部長 イ・チャンハク 他2名／'15.9.24／風土納土城との関連で、藤原宮跡・平城宮跡の保存・復元方法について視察
- ドイツ／Universität Stuttgarter・教授 計2名／'15.10.2／平城宮跡資料館・木簡の整理状況・平城宮跡等の見学
- 韓国／大韓民国文化財庁・書記官 キム・ジュンスン 他3名 (新羅王京事業団)／'15.10.13～10.14／平城京の発掘・整備・復元・管理・活用、藤原京の発掘調査状況、整備復元事例について視察
- 韓国／国立扶余文化財研究所・所長 ヘビョンソン 他2名／'15.10.26～10.29／百濟宮城および付属施設比較研究のための現地調査
- エル・サルバドル／観光局レクレーションセンター ラヌルフォ アントニオ エスコバル マカル 他2名／'15.10.27／金沢大学実施JICA課題別研修「中米地域資源としてのマヤ文明遺跡の保存と活用」
- グアテマラ／観光局文化遺産観光部門 エルバアレハンドリーナ シルバメネンデス 他3名／'15.10.27／金沢大学実施JICA課題別研修「中米地域資源としてのマヤ文明遺跡の保存と活用」
- ホンジュラス／観光局環境の持続可能性部門 タニヤ デルカルメン アマヤ カストロ 他2名／'15.10.27／金沢大学実施JICA課題別研修「中米地域資源としてのマヤ文明遺跡の保存と活用」
- モルディブ／ロアマリゾートモルディブ アットマーミギリ
ロアマ博物館・学芸員 バデーウ ウメアモハメド 他1名／'15.11.16, 26, 27／「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実務
- ネパール／文化観光省考古局
ネパール国立博物館・職員 プラダグン ミミ 他1名／'15.11.16, 26, 27／「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実務

- スリランカ／国家遺産省考古局
博物館課・考古研究補佐員 ウェラスリヤ ウパル スランガ ペレラ 他1名／'15.11.16, 26, 27／「博物館等における文化財の管理と展示活用」研修：文化財登録管理の実務
- フランス／フランス極東学院・教授 Bruno Bruguier／'16.2.21～2.27／情報共有研究会で発表
- 台湾／文化省政務次官 陳永豊 他5名／'16.3.4／研究所施設および平城宮跡等の見学、文化財保存について視察

海外からの招へい者一覧

- 張恩恵 (国立慶州文化財研究所・学藝研究士)／韓国／'15.8.3～10.2
- 黄建秋 (南京大学・教授)／中国／'15.9.24～9.28
- 馬照武 (儀征博物館・副館長)／中国／'15.9.24～9.28
- 張兆維 (揚州市文物考古研究所・副所長)／中国／'15.9.24～9.28
- 楊文勝 (河南省文物考古研究院・副院長)／中国／'15.11.16～11.20
- 趙志文 (河南省文物考古研究院・研究員)／中国／'15.11.16～11.20
- 李一丕 (河南省文物考古研究院・館員)／中国／'15.11.16～11.20
- 郭洋 (河南省文物考古研究院・副科長)／中国／'15.11.16～11.20
- 張慧明 (河南省文物局・処長)／中国／'15.11.16～11.20
- Erbprem Vatcharangkul (Director Underwater Archaeology Division Fine Arts Department, Ministry of Culture)／タイ／'16.1.19～1.23
- Le Xuan Phuong (ベトナム林業大学・准教授)／ベトナム／'16.1.20～1.23
- Do Thi Ngoc Bich (Member of Gorestry Association of VFU)／ベトナム／'16.1.20～1.23
- Nahar Cahayandaru Suyadi (Senior Conservator BOROBUDUR CONSERVATION OFFICE)／インドネシア／'16.1.20～1.23
- Sri Nugroho Marsoem (Head, Laboratory of Wood Chemistry & Fiber Faculty of Forestry Gadjah Mada University)／インドネシア／'16.1.20～1.23
- ThongLith LuangKhoth (Director Division of Archaeology, Department of Heritage Ministry Information, Culture, and Tourism)／ラオス／'16.1.20～1.23
- Ros Borath (President, National

- Committee for World Herotage Deputy Director General, Monuments and Archaeology)／カンボジア／'16.1.20～1.23
- Aung Winn (Assistant Director Minister's Office Ministry of Culture)／ミャンマー／'16.2.14～2.22
- Zar Zar Linn (Senior Assistant Engineer Grade-2 Department of Archaeology and National Museum Ministry of Culture)／ミャンマー／'16.2.14～2.22
- 李占楊 (河南省文物考古研究院・主任研究員)／中国／'16.2.29～3.4
- 裴韜 (河南省文物考古研究院・館員)／中国／'16.2.29～3.4
- 毛徳新 (許昌市文化広電新聞出版局・副調研員)／中国／'16.2.29～3.4
- 胡柏 (遼寧省文物考古研究所・研究員)／中国／'16.3.21～3.25
- 齊軍 (遼寧省文物考古研究所・館員)／中国／'16.3.21～3.25
- 王宇 (遼寧省文物考古研究所・館員)／中国／'16.3.21～3.25
- 辛宏偉 (遼寧省文物考古研究所・館員)／中国／'16.3.21～3.25
- 張璠 (西安曲江大明宮遺址文物局・副局長)／中国／'16.3.1～3.5
- 龔国強 (中国社会科学院考古研究所漢唐研究室・副主任)／中国／'16.3.1～3.5
- 趙曉軍 (洛陽市文物考古研究院隋唐研究室・主任)／中国／'16.3.1～3.5
- 繆韻 (洛陽市隋唐城遺址管理处・科長)／中国／'16.3.1～3.5
- 趙虎龍 (洛陽龍門石窟國際旅行社)／中国／'16.3.1～3.5
- Teav Sreyniet (王立芸術大学卒業生)／カンボジア／'16.3.24～3.31
- Bun Sreivy (王立芸術大学卒業生)／カンボジア／'16.3.24～3.31

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 田村 朋美：イタリア／'15.4.25～5.2／国際会議 (TECHNART 2015-Catania April 27・30, 2015)に参加、研究発表をおこなう／運営費交付金
- 佐藤 由似：カンボジア・ミャンマー／'15.4.25～5.22／アンコール文化遺産保護に関する協力、ミャンマー遺物調査／運営費交付金・科学研究費
- 渡邊 晃宏：韓国／'15.4.26～4.28／韓国木簡学会国際学術大会への参加／他機関負担
- 杉山 洋：カンボジア／'15.4.28～5.3／カンボジアにおけるポストアンコール遺跡の調査／科学研究費

- 金 宇大：韓国／'15.5.3～5.7／「金工品の流通と製作技術伝播からみた古代東アジアにおける地域間交流研究」に関わる資料調査／科学研究費
- 森本 晋：フランス／'15.5.11～5.16／国際シンポジウム「人類進化 遺伝子から文化へ」出席／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア・ミャンマー／'15.5.14～5.22／カンボジアにおけるポストアンコール遺跡の調査／科学研究費
- 加藤 真二：中国／'15.5.28～5.31／科研調査のための事前調査・現地調整／科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア／'15.5.31～6.14／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 降幡 順子：ドイツ／'15.6.1～6.7／UNESCO expert workshop conservation of mural paintings への参加・報告／先方負担
- 森本 晋：カンボジア／'15.6.2～6.8／アンコール地域調査国際調整委員会技術委員会出席／科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア／'15.6.2～6.9／カンボジアにおける西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
- 小野 健吉：イタリア・フィンランド／'15.6.13～6.22／イタリアにおける歴史的庭園等・フィンランドの世界遺産調査／他機関負担
- 石橋 茂登：中国／'15.6.14～6.19／高松塚古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査／東文研
- 降幡 順子：中国／'15.6.14～6.19／高松塚古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査／東文研
- 今井 晃樹：中国／'15.6.21～7.4／洛陽出土資料の調査／運営費交付金
- 栗山 雅夫：中国／'15.6.21～7.4／洛陽出土資料の調査／運営費交付金
- 佐藤 由似：ドイツ、イギリス、フランス／'15.6.26～7.13／世界遺産委員会、ロンドン大学初期上座部仏教シンポジウム発表、ヨーロッパ東南アジア考古学会発表／渡航費：運営費交付金・滞在費：運営費交付金、科学研究費
- 森本 晋：ドイツ・フランス／'15.6.27～7.13／世界遺産委員会、東南アジア考古学者ヨーロッパ会議出席／運営費交付金
- 田村 朋美：フランス／'15.7.5～7.11／国際会議（15th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists (EurAEASAA15)）に参加、研究発表をおこなう／科学研究費
- 杉山 洋：フランス／'15.7.5～7.13／アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築
- 研究成果の発表／科学研究費
- 加藤 真二：中国／'15.7.12～7.19／中華人民共和国細石刃石器群の調査／科学研究費
- 諫早 直人：韓国／'15.7.19～7.22／飛鳥寺塔心礎出土品および「古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造に関する考古学的研究」の類例調査／科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア／'15.7.21～7.24／カンボジア・西トップ遺跡における調査修復／運営費交付金
- 森本 晋：タイ／'15.7.23～7.29／バーミヤン関係会議・ミャンマー学会参加、資料見学／科学研究費
- 高妻 洋成：オーストリア／'15.7.29～8.4／ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷模型の材料調査／科学研究費
- 難波 洋三：アメリカ／'15.7.29～8.6／アメリカ国立文化機関の文化財防災に関わる調査、情報収集／運営費交付金
- 中島 志保：アメリカ／'15.7.29～8.6／アメリカ国立文化機関の文化財防災に関わる調査、情報収集／運営費交付金
- 佐藤 由似：カンボジア／'15.7.31～8.11／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア／'15.8.1～8.7／アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究／科学研究費
- 馬場 基：中国／'15.8.11～8.15／科研調査／他機関科学研究費
- 小野 健吉：チェコ・オーストリア／'15.8.16～8.24／「歴史と現状から見た庭園の観光資源としての可能性に関する研究－欧州との比較から」の庭園観光調査／科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア／'15.8.19～9.26／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 森本 晋：台湾／'15.8.30～9.5／国際学会CIPA2015（文化遺産記録国際委員会）出席／科学研究費
- 金田 明大：台湾／'15.8.31～9.4／CIPA2015発表・参加のため／運営費交付金
- 渡邊 晃宏：中国／'15.8.31～9.5／中国石刻資料調査／他機関科学研究費
- 小田 裕樹：韓国／'15.9.3～9.9／「東アジアにおける都城と葬地の政治的・社会的関連に関する比較史的総合研究」の一環として、百濟地域の墳墓調査／科学研究費
- 石田 由紀子：中国／'15.9.7～9.12／古代の測量技術と尺度に関する資料調査／他機関科学研究費
- 今井 晃樹：中国／'15.9.7～9.12／古代の測量技術と尺度に関する資料調査／他機関科学研究費
- 金田 明大：ポーランド／'15.9.14～9.21／ISAP2015発表・参加のため／科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア／'15.9.18～9.26／アンコール遺跡群における水利環境の復元／科学研究費分担金
- 諫早 直人：韓国／'15.9.20～9.24／「古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造に関する考古学的研究」の類例調査／科学研究費
- 森本 晋：カンボジア／'15.9.20～9.26／アンコール地域における遺跡記録の調査／科学研究費
- 神野 恵：イギリス／'15.9.22～9.26／SISJAC-SOAS Research Grant 2015-2016 第1回ミーティング／先方負担
- 玉田 芳英：英国／'15.9.22～9.29／京都大学大学院講義のための資料調査研究／他機関負担
- 高妻 洋成：カンボジア、ラオス／'15.9.23～9.30／文化庁受託拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業国際研究会参加／文化庁受託
- 海野 聡：中国／'15.9.25～10.3／中国国内における古建築調査および資料収集／科学研究費
- 森本 晋：マカオ／'15.9.26～9.30／PNC（太平洋近隣有効協会）2015総会に出席・研究発表／科学研究費
- 川畑 純：韓国／'15.10.5～11.27／慶州文化財研究所との発掘交流への参加／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 小野 健吉：アメリカ／'15.10.6～10.13／コロンビア大学との研究交流打合せ、アメリカ独立前後の記念物調査／運営費交付金
- 杉山 洋：アメリカ／'15.10.6～10.13／コロンビア大学との共同研究打ち合わせ／運営費交付金
- 佐藤 由似：アメリカ／'15.10.7～10.13／コロンビア大学との共同研究打ち合わせ／運営費交付金
- 大谷 育恵：中国／'15.10.10～10.19／サントリー文化財団（若手研究者のためのチャレンジ研究助成）「編年確立を目的とする中央アジア諸国で出土した漢鏡の調査」にともなう研究会参加／サントリー文化財団研究費・滞在費一部先方負担
- 金 宇大：韓国／'15.10.11～10.12／金工品の流通と製作技術伝播からみた古代東アジアにおける地域間交流研究／科学研究費
- 中島 義晴：中国／'15.10.13～10.17／中国における遺跡整備に関する情報収集／運営費交付金
- 内田 和伸：中国／'15.10.13～10.19／

中国における遺跡整備に関する情報収集／運営費交付金

●杉山 洋：カンボジア／'15.10.20～10.24／カンボジア・西トップ遺跡における調査修復／朝日助成金

●中村 一郎：ブータン王国／'15.10.21～11.2／ACCUユネスコ・アジア文化センター主催 ワークショップ／他機関負担

●森本 晋：キルギス／'15.10.26～10.31／アクベシム遺跡調査に参加／運営費交付金

●箱崎 和久：中国／'15.10.26～11.2／中国山西省南西部の古代建築調査／科学研究費

●鈴木 智大：中国／'15.10.26～11.2／中国山西省南西部の古代建築調査／科学研究費

●海野 聡：中国／'15.10.26～11.2／中国山西省南西部の古代建築調査／科学研究費

●村山 聡子：中国／'15.10.26～11.2／中国山西省南西部の古代建築調査／科学研究費

●降幡 順子：韓国／'15.10.30～11.2／韓国国内出土鉛釉陶器の資料調査・情報収集／科学研究費

●恵谷 浩子：中国／'15.11.1～11.4／日中大学交流文化遺産国際会議への出席および発表／先方負担

●影山 悦子：中国／'15.11.7～11.11／「第3回アジア文化フォーラム」等への出席／渡航費：文化庁・滞在費：中国文化部

●佐藤 由似：カンボジア／'15.11.9～11.14／アンコール王朝末期総合的歴史学の構築／科学研究費

●杉山 洋：カンボジア／'15.11.9～11.14／カンボジアにおけるデータベース構築に関する調査／科学研究費

●森本 晋：タイ／'15.11.12～11.15／国際ワークショップ「文化研究への科学技術の応用」に出席・発表／科学研究費分担金

●影山 悦子：ミャンマー／'15.11.18～11.26／ミャンマー拠点交流事業遺跡整備活用研修／文化庁受託

●森本 晋：ミャンマー／'15.11.18～11.26／ミャンマー拠点交流事業遺跡整備活用研修／文化庁受託

●小野 健吉：ミャンマー／'15.11.18～11.26／ミャンマー拠点交流事業遺跡整備活用研修講師／文化庁受託

●大河内 隆之：中国／'15.11.18～11.27／年輪年代調査による資料収集作業とミニシンポジウム参加のため／科学研究費

●鈴木 智大：中国／'15.11.20～11.23／東アジア前近代建築・都市史円卓会議における研究発表／科学研究費

●降幡 順子：イギリス／'15.11.20～

11.28／SOASセミナー参加・研究発表、博物館所蔵資料調査／先方負担・滞在費一部科学研究費

●小池 伸彦：中国／'15.11.23～11.27／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金

●清野 孝之：中国／'15.11.24～11.27／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金

●廣瀬 覚：中国／'15.11.24～11.27／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金

●諫早 直人：中国／'15.11.24～11.27／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金

●大谷 育恵：中国／'15.11.24～11.27／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究／運営費交付金

●高妻 洋成：オーストリア／'15.11.23～11.27／ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷模型の材料調査／科学研究費

●加藤 真二：中国／'15.11.23～12.4／壺井遺跡ならびに関連遺跡出土石器の調査／科学研究費

●芝 康次郎：中国／'15.11.24～12.4／壺井遺跡ならびに関連遺跡出土石器の調査／科学研究費

●杉山 洋：カンボジア／'15.11.25～12.6／カンボジアにおけるポストアンコール遺跡の調査／運営費交付金

●佐藤 由似：カンボジア／'15.11.25～12.10／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●丹羽 崇史：中国／'15.11.30～12.3／河南省文物考古研究院との共同研究／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●森川 実：中国／'15.11.30～12.3／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●尾野 善裕：中国／'15.11.30～12.3／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●影山 悦子：カンボジア／'15.11.30～12.4／ICC-Angkor（アンコール遺跡の保存と開発のための国際調整会議）／運営費交付金

●森本 晋：カンボジア、ラオス／'15.11.30～12.9／アンコール遺跡関連資料調査／科学研究費

●内田 和伸：韓国／'15.12.1～12.4／「新羅・月城と世界遺産の調査・研究」国際学術大会／先方負担

●今井 晃樹：中国／'15.12.14～12.16／中国社会科学院考古研究所との共同研究の

協議／運営費交付金

●渡邊 晃宏：中国／'15.12.14～12.16／中国社会科学院考古研究所との共同研究の協議／運営費交付金

●佐藤 由似：カンボジア／'15.12.15～12.28／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●杉山 洋：カンボジア／'15.12.17～12.26／西トップ遺跡の調査修復／朝日新聞文化財団助成金

●田村 朋美：ロシア／'15.12.23～12.27／ロシア・ウラジオストクおよび周辺地域出土ガラス製遺物の調査／他機関負担

●松本 直也：カンボジア／'16.1.12～1.16／西トップ遺跡整備事業の視察／運営費交付金

●松本 正典：カンボジア／'16.1.12～1.16／西トップ遺跡整備事業の視察／運営費交付金

●佐藤 由似：カンボジア／'16.1.12～1.19／カンボジア遠隔地拠点遺跡の調査研究／科学研究費分担金

●杉山 洋：カンボジア／'16.1.12～1.19／カンボジアにおける遠隔地遺跡調査研究／科学研究費分担金

●諫早 直人：モンゴル／'16.1.17～1.23／匈奴墓出土土具の調査／高梨学術奨励基金

●馬場 基：台湾／'16.1.18～1.20／漢簡資料の調査および撮影／科学研究費

●中村 一郎：台湾／'16.1.18～1.20／漢簡資料の調査および撮影／科学研究費

●森本 晋：韓国／'16.1.25～1.27／情報基準資料の調査／運営費交付金

●尾野 善裕：イギリス／'16.1.25～1.30／セイズベリー日本文化研究所主催セミナーへの参加、および口頭発表／先方負担

●佐藤 由似：カンボジア、ミャンマー、ラオス／'16.1.27～3.2／インドシナ半島東西回廊の調査、西トップ遺跡北祠堂の調査、アンコール文化遺産の調査／科学研究費分担金・朝日文化財団・運営費交付金

●影山 悦子：ウズベキスタン／'16.1.31～2.6／イスラム以前の遺物の調査／科学研究費

●森本 晋：ミャンマー／'16.2.1～2.10／コー・タ寮跡の調査による人材育成／受託拠点交流事業ミャンマー

●杉山 洋：ミャンマー、カンボジア／'16.2.1～2.12／ミャンマー・カンボジアに於ける東西回廊関係遺跡の調査／科学研究費分担金

●田村 朋美：ミャンマー／'16.2.3～2.10／ミャンマーにおける東西回廊関連遺跡の現地調査／運営費交付金

●大谷 育恵：カザフスタン、キルギス

タン／'16.2.6～2.15／サントリー文化財団（若手研究者のためのチャレンジ研究助成）「編年確立を目的とする中央アジア諸国で出土した漢鏡の調査」にともなう調査／サントリー文化財団研究費

●馬場 基：台湾／'16.2.16～2.18／中央研究院歴史語言研究所との研究協力協約書締結随行／科学研究費

●方 国花：台湾／'16.2.16～2.18／中央研究院歴史語言研究所との研究協力協約書締結随行／科学研究費

●松村 恵司：台湾／'16.2.16～2.18／中央研究院歴史語言研究所との研究協力協約書締結／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担

●渡邊 晃宏：台湾／'16.2.16～2.18／中央研究院歴史語言研究所との研究協力協約書締結随行／科学研究費

●諫早 直人：中国／'16.2.16～2.23／匈奴墓出土馬具および関連資料の調査／高梨学術奨励基金

●杉山 洋：カンボジア・ラオス／'16.2.23～3.2／カンボジア・ラオスに於ける博物館展示指導／運営費交付金

●諫早 直人：韓国／'16.2.24～2.27／国立歴史民俗博物館共同研究第4回研究会への参加および発表／先方負担

●小野 健吉：ポルトガル／'16.2.26～3.5／ポルトガルの世界遺産調査／他機関負担

●石橋 茂登：韓国／'16.3.3～3.5／資料調査／助成金

●大谷 育恵：ウズベキスタン／'16.3.4～3.12／サントリー文化財団（若手研究者のためのチャレンジ研究助成）「編年確立を目的とする中央アジア諸国で出土した漢鏡の調査」にともなう調査／サントリー文化財団研究費

●番 光：オランダ／'16.3.7～3.13／ライデン国立民俗博物館所蔵の日本大工道具の調査／科学研究費

●海野 聡：イギリス・フランス／'16.3.8～3.21／ヨーク大における建築史講演・討議および英仏の歴史的建造物のエクスカッション・研究打ち合わせ／渡航費：先方負担・滞在費：先方負担、科学研究費

●渡邊 晃宏：韓国／'16.3.10～3.13／日韓木簡ワークショップ参加／先方負担

●加藤 真二：中国／'16.3.12～3.17／黒龍江省における霊井関連遺跡出土石器の調査／科学研究費

●杉山 洋：カンボジア／'16.3.13～3.17／カンボジアにおける青銅製品の調査／他機関負担

●諫早 直人：イギリス／'16.3.13～3.20／「ゴerland・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の

再構築」にかかる調査／科学研究費分担金
●佐藤 由似：カンボジア／'16.3.13～3.20／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●石橋 茂登：中国／'16.3.15～3.18／古墳壁画・天文関連資料調査／運営費交付金

●小沼 美結：中国／'16.3.15～3.18／古墳壁画・天文関連資料調査／運営費交付金

●若杉 智宏：中国／'16.3.15～3.18／古墳壁画・天文関連資料調査／運営費交付金

●森本 晋：ドイツ、フランス／'16.3.15～3.20／情報基準資料の調査／運営費交付金

●小田 裕樹：中国／'16.3.15～3.25／「東アジアにおける都城と葬地の政治的・社会的関連に関する比較史的総合研究」の一環として、河北省周辺地域の墳墓調査／科学研究費分担金

●大谷 育恵：ロシア／'16.3.27～4.4／サントリー文化財団（若手研究者のためのチャレンジ研究助成）「編年確立を目的とする中央アジア諸国で出土した漢鏡の調査」にともなう調査／サントリー文化財団研究費

●金田 明大：ノルウェー／'16.3.29～4.4／CAA2016発表・参加のため／科学研究費

公開講演会

特別講演会（東京会場）

2015年10月24日

◆西田 紀子「なぜ建築史の研究者が発掘現場に？」

発掘調査といえは、現在では考古学のイメージが定着している。しかし、建築遺構を発掘する技術を確立したのは建築史研究者であった。この発表では、法隆寺東院や藤原宮跡等の調査をととして建築史研究者によって建築史学と考古学が発展してきた歴史、そして奈良文化財研究所の沿革と調査体制を概説した。また発掘調査の成果を反映させた、古代建築の復原研究と遺跡整備の実例等も紹介。建築史研究者が考古学の発掘調査現場に立つ理由と、建築史研究者が発掘調査現場で果たす役割について考察した。

◆西山 和宏「発掘遺構と古代建築をつなぐ」

発掘調査では、様々な建築遺構が検出される。遺構にともなう上部構造の部材等が発見されることはきわめて稀であり、考古学的な古代の建築遺構から上部構造を考えるためには、古代建築の知識や特徴を知っておく必要がある。

そのため、まず発掘調査でみつかると建物やそれに関連する遺構（掘立柱建物、礎石

建物、基壇等）について、つづいて30棟余りが現存する古代建築に共通する特徴について紹介した。これらをふまえて、発掘遺構から上部構造を復原するうえでの考え方、前提等について説明をおこなった。

◆鈴木 智大「古代建築の復原のてがかり—平城宮朱雀門と第一次大極殿—」

平城宮跡に復原された朱雀門と第一次大極殿。奈良文化財研究所の建築史研究者が、経験と知識を総動員して挑んだ研究プロジェクトである。この2つの建物の復原検討過程を振り返ることで、発掘遺構を最大の根拠としながら、文献、絵画、現存建築、出土遺物等、多岐におよぶ復原のてがかりの一端を紹介した。そして復原にあたる奈文研の建築史研究者が研究にこめる思いを伝えた。

◆海野 聡「東西楼は入母屋か寄棟か—平城宮第一次大極殿院の復原にむけて—」

平城宮第一次大極殿院の東西楼は、礎石と掘立柱を併用した特殊な遺構で、現存建築に類をみないため、上部構造の復原は困難を極め、既往案でも屋根の形が入母屋造・切妻造と紆余曲折を経てきた。しかし新たな発掘調査成果に加えて検討したところ、遺構の特殊性・出土した巨大な柱根や礎石等の発掘遺構や遺物から東西楼の屋根の形状や構造が導かれた。その最新の復原研究の成果を発表し、復原図面・模型を一般の方々を紹介した。

◆箱崎 和久「山田寺倒壊回廊が語る古代建築史」

倒壊した状態で発見された山田寺の回廊の建築部材からは、現存する法隆寺西院の回廊と比較できるほど詳細な建築技法や様式を見いだすことができた。その結果、現存建築の位置づけも再考に迫られた。新たな現存古代建築の発見は望むべくもないが、発掘調査によって新たに建築遺構が発見され、現在の日本建築史の教科書が書きかえられる可能性がある。また、現存建築がごく限られている7世紀の建築の場合、新たな発見が東アジアの建築史やその社会背景にまでおよぶかもしれない。ここでは山田寺倒壊回廊の発見を通して、波及する建築史の問題点に言及し、古代建築史研究のおもしろさについて紹介した。

◆番 光「出土部材をしらべ、まもり、つたえる」

出土部材は、一般にはあまりなじみのない考古遺物である。山田寺倒壊回廊のような例はごく稀で、本来の建物とは別の用途

に転用されて発見されることも多い。出土部材は、現存建築の部材とはその物質的な性格がまったく異なり、扱いは難しい。しかし、出土部材がもつ建築的な情報は、現存建築ではすでに失われ知りえないような部分の建築技術や木材加工技術を知るうえで貴重である。その情報を読み解くには発掘調査と建築史、両方の専門知識が必要であり、それゆえに研究の蓄積が十分とはいえず、今後の課題である。

第116回公開講演会

2015年6月20日

◆松村 恵司「押勝の金・銀・銅貨」

昭和12年(1937)西大寺畑山の造成現場から金銭「開基勝寶」31枚と、「買行」の文字が残る大型銀銭の破片、金の延板等が出土し、一大ニュースとなった。出土場所の現況を紹介するとともに、平城京における位置や、遺跡の性格について考察を加えた。記録のない「買行」銀銭は、唐の大型の当五十銭「乾元重寶」を模倣した当五百銭の試鑄貨であり、銭文を「商買行寶」と推定。時の宰相惠美押勝が当十の「萬年通寶」、当百の銀銭「大平元寶」、当千の金銭「開基勝寶」とともに発行を計画したものと推測した。こうした貨幣政策の失敗が遠因となり、押勝は764年に反乱を起こして失脚した。

◆田村 朋美「ガラスからみた東西交易：日本出土のローマ・ガラスの起源」

近年、玉類を中心としたガラス製遺物について、製作技法と化学組成の両面から検討する「考古科学的」な研究が進み、日本列島では弥生時代以降、様々な起源をもつガラス製遺物が流通していたことがあきらかになってきた。さらに、最新の分析調査で、地中海周辺地域で生産されたナトロンガラス(ローマ・ガラス)が日本列島に一定量流入していたこともあきらかとなった。今回の公開講演会では、日本列島に流入したローマ・ガラスの特徴と時期変化、そして日本列島への流入経路等についての最新の研究成果について紹介した。

◆尾野 善裕「『日本後紀』を考古学で解釈する～弘仁6年正月丁丑条を中心に～」

最新の土器編年研究をふまえ、尾張における緑釉陶器生産の開始が弘仁年間と考えられることを説明し、過去様々な解釈されてきた『日本後紀』弘仁6年正月丁丑条が、尾張における緑釉陶器生産開始にまつわる記事であることを論じた。あわせて、初期の尾張産緑釉陶器が圧倒的に嵯峨天皇の身辺で消費されていたと考えられることを指

摘し、陶工の末端技術官吏への登用記事でもある弘仁6年正月丁丑条の中に、優れた品質の緑釉陶器生産に成功した工人に対する国家権力による褒賞としての、恣意的な人事処遇を読み取りうることを示した。

第117回公開講演会

2015年11月7日

◆小田 裕樹「古代の盤上ゲーム「樗蒲(かりうち)」の復元」

平城京二条大路SD5100出土土師器杯の内面には円形の列点記号が刻されている。同様の記号は秋田城跡をはじめ古代の都城・官衙関連遺跡を中心に分布している。

この記号は朝鮮半島のユンノリという盤上ゲームの盤面に通底し、より古いタイプの記号と見ることが出来る。従来『万葉集』の用字の検討から、奈良時代にユンノリに似た「樗蒲(かりうち)」という遊戯が存在することが推定されていたが、本資料はその盤面の可能性が考えられる。

また、ユンノリ盤面との比較や列点記号の分析から、「樗蒲(かりうち)」はユンノリよりも複雑で戦略性が高いゲームであること、場の状況に応じて簡単にゲームができる点の特徴であることを指摘した。

◆石田 由紀子「藤原宮から平城宮へー宮の瓦づくりの移り変わりー」

古代において都城の造営には土地改良、資材確保、運搬、建設等あらゆる面で莫大な労力が必要とされ、瓦生産においても、寺院の造営とは比較にならないほどの莫大な量を短期間で生産する必要があった。大量生産は藤原宮・平城宮造営において共通する重要課題であり、粘土紐作り、一枚造りといった新技術や、窯構造等、様々な面から効率的な生産を追求するなかで新技術が導入されていた様子を紹介した。また、藤原宮の瓦窯は藤原宮造営の打切にともない、操業を終了したものの、瓦工人の一部は平城宮の瓦窯に移り、平城宮の瓦生産の礎になったことを同範関係や製作技法から指摘した。

◆諫早 直人「ウマ駆ける古代日本」

四周を海に囲まれていた日本列島にウマが本格的に普及するのは古墳時代のことである。当然ながらウマが独力で海を渡ったわけではなく、そこにはヒトが介在していた。本発表では、ウマが登場する5世紀から、定着する7世紀までの過程を、最新の考古資料にもとづいて、当時の社会的背景をふまえながらトレースした。5～7世紀という時間幅の中でウマの導入・普及過程を捉えなおすことで、かつては大陸からの

騎馬民族の侵入と関連付けて解釈されてきたウマの出現が、日本列島に住んでいた人々の意志によるものであることを浮き彫りとした。

研究集会

◆文化的景観研究集会(第7回)

2015年11月28～29日

文化的景観研究集会(第7回)を、「営みの基盤—生態学からの文化的景観再考—」をテーマとして開催した(共催:京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課)。

初日は当研究所平城宮跡資料館講堂にて、基調講演・研究報告4本・ポスターセッション(学術研究部門/地域計画部門/地域活動部門)・パネルディスカッション「文化的景観における生きものの意味と調査・計画」をおこなった。

2日目は、自然的基盤—都市文化—生態系の関係をテーマとして、重要文化的景観「京都岡崎の文化的景観」(京都市)のエクスカージョンをおこなった。

参加者は約90名であった。また、ポスターセッションには21件の発表があった。(恵谷 浩子)

◆古代官衙・集落研究会(第19回)

2015年12月11日～12日

2015年度は「宮都・官衙・集落と土器(官衙・集落と土器2)」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、松本太郎「東国の官衙・集落と土器様相」、長直信「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」、春日真実「越後の官衙・集落と土器様相」、村田晃一「陸奥国北辺における城柵の造営と集落・土器」、小田裕樹「飛鳥・藤原・平城地域とその周辺の土器様相」、市川創「難波地域とその周辺の土器様相」、筒井崇史「京都府南部における土器様相」の計7本である。発表終了後、江口桂氏、馬場基都城発掘調査部主任研究員の司会による総合討議をおこない、都城・官衙・集落から出土する土器の特徴と歴史的背景に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計149名で、アンケートでは98%が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2016年度に刊行する予定である。

このほか、2014年度に実施した研究集会の研究報告『官衙・集落と土器1』を2015年12月に刊行した。(小田 裕樹)

◆遺跡整備・活用研究会

2015年12月18日

2015年度は、「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」をテーマに、遺跡の活用において近年導入が盛んになってきたAR/VR技術を中心に、その技術開発の最前線や全国各地での導入状況の把握、運用実態と課題の共有を目的に開催した。

研究会に先立ち、まず全国の導入状況に関する事前アンケートを実施した。また研究会当日は、基調講演「3D e-Heritageとクラウドミュージアム」および4本の報告「遺跡におけるVR/AR技術利用の現状」「アプリ開発・運用の実際」「デジタルコンテンツを活用したガイドツアー」「Mixed Reality技術を用いた文化財の復元」をいただき、これを受けて総合討議をおこなった。併せて、平城宮跡第二次大極殿跡現地等でAR技術を用いたアプリのデモをおこなった。(高橋 知奈津)

◆保存科学研究集会

2016年1月22日

出土木製遺物の保存と活用においては多くの課題が山積している。出土木製遺物の保存の現状と課題について、「出土木製遺物の保存の現状と課題」をテーマに研究会を開催した。出土木製遺物の保存に関する6件の研究発表の後、総合討議をおこなった。総合討議では、木製遺物の埋蔵環境、発掘現場における取り扱い、保存処理までの一時保管、保存処理法、収蔵と展示の観点から活発な議論がなされ、現状と課題について再確認するとともに共有できたことはきわめて意義深い。今後、さらなる基礎研究の蓄積と応用研究の推進をはかることにより、出土木製遺物をより良好な状態で保存と活用を推進することができるものと期待できる。(高妻 洋成)

◆古代瓦研究会(第16回)

2016年2月6日～7日

2016年2月6・7日に「8世紀の瓦づくりⅤ—東大寺式軒瓦の展開—」をテーマとして、奈文研平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等102名(2日間のべ184名)である。6日は、廣岡孝信氏(奈良県立橿原考古学研究所)「東大寺の東大寺式軒瓦」、石田由紀子「平城宮の東大寺式軒瓦」、清野陽一「頭塔の東大寺式軒瓦」、今井晃樹「西大寺・西隆寺・興福寺の東大寺式軒瓦」、原田憲二郎氏(奈良市埋蔵文化財調査センター)「新薬師寺・元興寺の東大寺式軒瓦」、翌7日は、小谷徳彦氏(甲賀市教育委員会)「近

江地域の東大寺式軒瓦」、渡部明夫氏(四国学院大学)「讃岐地域の東大寺式軒瓦」、倉澤正幸氏(上田市立博物館)「信濃地域の東大寺式軒瓦」の研究報告および資料観察会をおこなった。7日午後には、林正憲の司会により総合討議をおこない、平城京内寺院の東大寺式の製作技法の特徴と年代観、各地の東大寺式軒瓦の文様・製作技法との比較検討等とその背景について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は、2017年度に刊行する予定である。(清野 孝之)

◆遺跡整備事例研究会

2016年3月2～3日

遺跡整備の国際的な動向を視野に入れ、古代の都城遺跡とも関係の深い、中国の唐長安城大明宮跡、隋唐洛陽城跡の発掘調査と整備の担当者を招聘し、「長安・洛陽における遺跡の発掘調査と整備活用の現況」と題する研究会をおこない、情報収集をおこなった。招聘者は、龔国強中国社会科学院考古研究所漢唐研究室副主任、張璠西安曲江大明宮遺址文物局副局長、趙曉軍洛陽市文物考古研究院隋唐研究室主任、繆鈞洛陽市隋唐城遺址管理处科長、趙虎龍洛陽龍門石窟國際旅行社社長、劉海宇岩手大学平泉文化研究センター特任准教授であった。

2010年から中国国家文物局が進めている国家考古遺跡公園による整備手法や、実際の整備状況がきらかとなった。

(内田 和伸)

科学的研究費等

◆木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究(S) 継続

A 木簡資料の情報取得の効率化では、(1)アノテーションツールMokkanotatorを活用して平城宮跡の東方官衙の大土坑SK19198等の削屑の整理・釈読をおこない、木簡概報を2冊刊行した。(2)引き続き所内外の木簡画像の蓄積に努めた。

B 木簡資料に関する様々な知の結集では、(1)〈画像引き〉文字画像データベースとして「木簡・くずし字解読システムMOJIZO」を公開した。奈文研と東大史料編纂所が共同開発し、連携検索を実現したものである。(2)古代木簡の文字の標準字体一覧作成のための基礎作業を行き続きおこなった。(3)「木簡字典」の高次化を、①検索履歴の追加、②意味(タグ)検索機能の搭載の2点について実現した。(4)周辺データベース群として、漢字と読みの両方から

検索できる「古代地名検索システム」を公開し、「正倉院文書(書状)字典」の研究者用試用版を開発した。

C 出土文字資料統合データベースの構築と連携の拡充では、B(1)で東大史料編纂所との連携を強化したほか、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間で、木簡・簡牘の研究協力に関する協約書を締結した。また、画像引きの文字画像データベースの実現により、〈文字引き〉データベース「木簡字典」との統合への基礎を築くことができた。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発

代表者・金田 明大 基盤研究(A) 継続

導入した機器の運用に関する検討を進めている。

地中レーダー、磁気探査、電磁探査の各機器については、機器の牽引方法と位置情報取得方法の改善を目的として検討をおこなった。この結果、現地の状況にあわせた牽引手法について試験をおこなうことができた。

位置情報については複数の手法を検討したが、十分な成果を得られていない。機器の老朽化もあり、次年度改善をはかっていく予定である。

また、近年需要が高まりつつある石垣内面の探査についても、金沢城および大和郡山城で実際の作業とそれにもとづく機器の改良をおこない、迅速かつ安全にデータを取得する手法について検討をおこなっている。成果として、石垣背面の空洞部や水の分布について示唆する可能性が高い異常部が確認され、今後他手法と組み合わせることで石垣の研究および保守管理に資する情報を得ることの可能性を考えることが出来た。

◆アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究

代表者・森本 晋 基盤研究(A) 継続

本研究は、カンボジアのアンコール遺跡群における調査・研究成果の蓄積を整理し情報共有するための有効な手段の開発を目指している。4ヶ年計画の3年度にあたる2015年度は、電子化資料の目録を体系化する作業、電子化画像から文字データを取り出して校正する作業を中心におこなった。文字データを元に用語の出現頻度等の調査もおこなっている。また、個人的なコレクションの目録を整備して電子化する試みをおこない、公表資料との照合についても研究した。2月23日にフランス極東学院の研究者を招いて研究会を実施し、アンコール遺跡群に関する資料の実態について

の理解を深めた。

◆中国新石器時代における家畜・家禽の起源と、東アジアへの拡散の動物考古学的研究
代表者・松井 章 基盤研究 (A) 継続

本研究は、初期農耕に関連する中国新石器時代遺跡出土の動物骨に対する考古学的研究を軸に、家畜・家禽の起源地とその伝播、発展の過程を解明することを目的とする。

2015年度は、浙江省文物考古研究所と進めてきた共同研究の成果について、7月の日本動物考古学会、10月の日本人類学会にてそれぞれ発表した。また、それらの成果をまとめた研究成果報告書を刊行した。

このほか、12月には、奈良文化財研究所のデータベース上に、三次元骨格図譜「3D Bone Atlas Database」を公開した。

◆歴史的文献に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究
代表者・馬場 基 基盤研究 (A) 継続

本研究は、歴史的な文献に関する様々な経験知について、情報学の技術・手法も導入しつつ、研究資源化を進め、歴史・文学研究の深化と発展を目指す。2015年度は、気付きメモ（気づきを任意に記述）約860件、観察記録シート（文字の観察をフォーマットで整理）約5180文字件を蓄積した。

また、関係者による研究会で研究成果の共有や方向の検討をおこなったほか、シンポジウムの後援（「文化財を守り、未来へ伝えてゆくために」2015.9.20・於大和文華館。関係者3名報告）および共催（「字体と漢字情報」2015.11.21～22、於国立国語研究所。関係者5名報告）を通じて社会に研究成果を発信し、また研究の深化をはかった。

◆「発掘遺構による古代寺院建築史の構築」
代表者・箱崎 和久 基盤研究 (A) 新規

発掘調査で検出した古代寺院の遺構を集成し、それを分析するというオーソドックスな手法で古代建築史を見直そうというのが研究の大きな目的である。それとともに、近年の研究によって、地方寺院間や官衙との関係から、瓦の生産体制や流通についてもあきらかになってきており、瓦研究の成果を総合して古代寺院建築史を検討したいと考えている。

2015年度は、発掘遺構の集成作業、および帰属遺構が判明する出土瓦の集成作業を重点的におこなった。発掘遺構の集成作業では、奈良文化財研究所が公開している古代寺院データベースを利用しながら、近畿・四国地方の遺構の収集を完了し、中

国地方の収集を継続している。その結果、461の遺跡で遺構を確認し、そのうち金堂は139件、講堂が78件、門は145件等のデータを収集した。今後も同様の作業を継続しながら、データベースの作成と分析を進めていく予定である。

瓦研究に関しては、主に軒瓦の同范関係と製作技法の把握、道具瓦の収集に主眼をおいている。発掘遺構の集成作業と同じく、古代寺院データベースをもとに、遺構が確認されている寺院遺跡から出土した瓦磚類について集成をおこなった。2015年度は、九州・四国・中国・近畿・中部・関東の一部の計366遺跡についてデータを収集した。この作業は今後も継続する。また、古代の地方寺院においては、瓦生産や流通について、官衙遺跡と密接な関連性がある場合も多い。このため今後は官衙関連遺跡についても同様の作業をおこなっていききたい。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義
代表者・光谷 拓実 基盤研究 (B) 継続

2015年度は11月中旬に江蘇省の揚州文物考古研究所を訪問し、新たに発掘調査で出土した木槨・木棺材のなかから、年輪解析用に26点のサンプルを収集した。南京林業大学では潘教授の協力のもと採取サンプルの調整と年輪の写真撮影をおこなった。現在これらの年輪解析を継続中である。また、11月20日に本研究課題に関わる研究会（参加者：約40人）を南京大学でおこない、中国側の考古学および年輪研究者とのあいだで意見交換をおこなった。

◆弥生時代における青銅器生産の総合的研究
代表者・難波 洋三 基盤研究 (B) 継続

2015年度は、岡山県神明銅鐸や個人蔵の外縁付鈕1式銅鐸等のICP分析と鉛同位体比分析、兵庫県古津路出土の中細形銅剣b類5本の鉛同位体比分析等をおこない、基礎データの充実をはかった。また、4月に兵庫県南あわじ市でみつかった銅鐸7個と銅舌7本の調査では、舌と鈕に紐の痕跡を発見し銅鐸の使用法の実態を明確にするともに、2・4号銅鐸と中ノ御堂銅鐸が同范であることを確認した。さらに、鳥取県出土青銅器の調査では、県立博物館所蔵銅剣の間に魚（サメカ）の線刻があることを発見した。これらの成果は、弥生時代の青銅製祭器を研究するための重要な情報となるであろう。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造と物性・機能の解明

代表者・北田 正弘 基盤研究 (B) 継続

高松塚古墳試料については、漆喰内部の孔・割れ等の構造をX線CTであきらかにし、顔料・表面茶色汚染層等の成果を6編の論文とした。日本刀の研究では非金属介在物の3次元構造を走査電子顕微鏡で観察して化合物と元素分布をあきらかにし、海外学会で発表した。同様な鉄鋼文化財である明治初期の輸入鉄道レールの分析では、近代のパドル鋼であること、双晶等の存在から冷間で最終加工したことをあきらかにした。油絵顔料については、コバルトブルー等のナノ粒子構造をあきらかにし、明治期油絵の顔料についても微細構造を調べた。

◆歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究—欧州との比較から
代表者・小野 健吉 基盤研究 (B) 継続

日本を対象とした現地調査としては旧浜離宮庭園・六義園等の利用統計データを入力し庭園管理者からの聞き取り調査で現状を把握した。文献調査としては、江戸時代初期の『隔賞記』の庭園利用（見物）関連の記事の抽出とデータベース化をおこなった。いっぽう、欧州については、英国でハンプトンコート等の庭園現地調査をおこなうとともにイングリッシュヘリテージで文献資料調査をおこなった。さらに、オーストリアのシェーンブルン宮殿庭園、チェコのレドニツェ・バルティツェ城庭園等の現地調査をおこなった。

くわえて、庭園と観光に関する研究集会を開催し、日本およびイギリス・フランス・イタリアにおける庭園と観光の歴史的な在り方に関する多くの知見を得た。

◆東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復元的調査研究
代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 継続

本研究は、東大寺に膨大に存在する未整理の文書聖教について、基礎的な調査を進め、その検討を通じて、伝来過程や組織の内実等を理解しようとするものである。あわせて、南都の寺社等に伝来していた文書聖教について、その把握につとめ、伝来状況等をあきらかにすることを意図している。

2年目である2015年度は、新修東大寺文書聖教の第80函～第85函の調査を実施した。また、東大寺所蔵の興福寺関係資料について、明治初年の日記の一部の翻刻作業を実施している。さらに、関連する資料である、個人所蔵の興福寺関係資料の調査を開始した。また、東大寺中院院所蔵の襖・屏風下張り文書について、襖・屏風か

ら古文書をはがす作業を実施している。

◆アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築 代表者・杉山 洋 基盤研究 (B) 海外継続

表記の研究に関して、昨年度は15世紀の王都であるロンヴェークの発掘調査をおこなった。

まず中心部の王宮推定部で5箇所の特レンチを開け、土層堆積状況をはじめとする、初期的なデータの収集をおこなった。その結果、まず掘立柱建物と思われる堀方と土器の詰まった採取穴を検出し、掘立柱型式の建物の存在を究明する手がかりとなった。また都城跡南側であけた2箇所の特レンチでは金属製品の工房跡が検出され、羽口ヤルツボと言った鑄造関係の道具類とともに、焼土面や焼土土壌が検出され、この部分での工房の立地があきらかとなった。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究 代表者・松村 恵司 基盤研究 (B) 継続

新4ヶ年計画の初年度となる本年度は、国単位に作成した和同開珎出土遺跡の分布図を統合して、全国出土分布図を完成させた。これにより出土遺跡の多くが駅路沿いに分布する傾向がさらに明確になった。

また、畿外・地方における銭貨流通の実態の解明に向けて、北陸道諸国を対象に和同開珎出土遺跡の分析に着手した。その結果、出土は官衙関連遺跡や荘園遺跡、港津遺跡、有力者の居宅跡等に限定され、富豪層や郡司層の主導のもとに、銭貨を交換手段とする交易が港津や駅路沿いに展開した可能性が浮上してきた。これは運脚夫や役夫の帰郷時に米の売却を命じた和銅初年の詔や蓄銭叙位法等、律令国家の銭貨政策と密接に関わる現象として理解できた。また「和同開珎出土遺跡データベース」を完成させ、当研究所のHP上での公開を開始した。

◆東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南靈井遺跡出土品の徹底分析— 代表者・加藤 真二 基盤研究 (B)・海外新規

5月、7月、11月、2016年3月に河南省文物考古研究院での靈井遺跡の遺物調査を中心に、泥河湾盆地、古脊椎動物与古人類研究所、社科院考古研究所、河北省文物研究所、黒龍江省文物考古研究所、河北師範大、北京師範大等で現場視察、資料観察と整理、試料サンプリング、使用痕分析等をおこなった。調査参加者は、加藤のほか、鹿又喜隆、芝康次郎、高倉純、長沼正樹、麻柄一志等(各人の科研費によるものも含む)。これらの調査研究の成果は、国

際第四紀学研究会名古屋大会、北アジア調査研究報告会で報告し、鋭意、論文化を進めている。

◆古代東アジアにおける土木技術系譜の復元的研究

代表者・青木 敬 基盤研究 (C) 継続

2015年度は最終年度であり、東日本における寺院堂塔の発掘調査例を収集したことで、列島各地の類例を集め終えた。集成後、これら類例の分析をおこない、飛鳥時代後半における基壇構築技術と伽藍のありように相関性を見出した。この成果については、白鳳時代を考える会特別講演会にて「白鳳寺院の展開—寺院造営技術の分析を中心に—」と題して口頭発表をおこなった。また5世紀末以降、列島各地に分布する高大化した墳丘を有する古墳は、北魏の皇帝陵に端を発し、東アジア世界に展開した潮流という文脈で理解した。これについては、口頭発表で第18回九州前方後円墳研究会佐賀大会にて「古墳における墳丘と埋葬施設」、論文では『日韓文化財論集Ⅲ』において「日韓王陵級古墳における墳丘の特質と評価」と題して発表した。

◆中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究

代表者・鈴木 智大 基盤研究 (C) 継続

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本・中国・韓国の比較をおこなうことで、東アジアにおける木造建築の技術およびその設計論理を解明する試みである。

最終年度となった2015年度は、前年度に引き続き当該期の中国における建築の変革と日本の比較をおこない、「長崎唐寺における中国建築の穿插枋」(日本建築学会大会学術講演、2016年予定)として、論考をまとめた。

また清華大学(中国北京)において開催された第2回東アジア前近代建築・都市史円卓会議において、「日本の仏教建築における類型と様式」と題して、発表をおこなった。東アジアの視点に立ち、中世日本における建築の変化を理解する枠組みの再定義の試みである。

◆東アジアにおける鉛釉陶器の原料とその時間的・地域的特徴に関する研究

代表者・降幡 順子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、鉛釉の原材料の変遷、さらに時代とともに変化する製品構成との関連と生産技術を究明することを目的とする。2015年度は渤海地域において鉱石や金属製遺物の分析資料の採集と分析、朝鮮半島の生産関連遺物の情報収集をおこなった。

また国内では、平城京寺院跡から出土した施釉瓦の胎土分析、中世の鉛ガラスの分析等をおこなった。平安京・洛北における鉛釉陶器と東海地域の鉛釉陶器の胎土と釉薬の調査結果を報告し、さらに沿海州出土鉛釉陶器の化学的特徴の変遷について論文としてまとめた。

◆平安時代出土文字資料の動態的歴史分析—〈荷札の終焉〉にみえる木簡の機能

代表者・山本 崇 基盤研究 (C) 継続

本申請研究は、平安時代木簡の性格と機能を律令制の変質過程のなかで合理的に説明することを課題としている。最終年度にあたる2015年度には、奈良県橿原市・桜井市・天理市、兵庫県神戸市・豊岡市、愛知県豊橋市、静岡県磐田市、群馬県前橋市、秋田県大館市、鳥取県鳥取市、熊本県八代市等から出土した木簡・墨書土器等の熟覧調査および撮影をおこない資料収集した。さらに、3年間の探訪調査と過去の記帳ほか調査記録の精査をふまえ、約4250点におよぶ全国出土平安時代木簡を集成した『平安時代木簡集成(稿)』を編み、成果のまとめとした。

◆ツガ年輪による近世以降の建造物の年代測定および用材産地推定手法の確立

代表者・藤井 裕之 基盤研究 (C) 継続

昨年度までの成果により、間接的ながら、それまで遊離状態にあったツガ古材のパターンに付与していた年代の妥当性を検証できた。古材と現生材とが重複する年代区間の状況を主に四国産材でさらに検討すると、両者のパターンの推移に矛盾は認められない。また産地については、近畿・四国に関して識別できる可能性が高まった。これらをひとまずの成果とし、懸案の古材と現生材の直接的なパターン接続の実現は、今後の新資料を待つこととした。

2006年に着手した一連の作業では、各地の木材、木造建造物をじかに探索したが、ツガを含めた近世、近代の多様な木材利用に関する評価は、未だ不十分なようである。年輪研究からも、それに関わる参考資料を今後積み上げていく必要があるだろう。

◆中国由来の木彫像の用材観

代表者・伊東 隆夫 基盤研究 (C) 継続

本年度は2015年12月にフランス、パリにあるCernishi美術館、リヨンにあるConfluences美術館を訪問し、樹種の調査に関する共同研究について打ち合わせた。同時にベルリンにあるベルリン民族博物館およびアジア美術館を訪問し共同研究を申し入れた。事前の連絡で前向きであったべ

ルリン民族博物館では7体のdeity statueおよび3体の仏像彫刻から木片試料の提供を受け、日本に持ち帰った。そのうち3体の仏像彫刻の試料を調べた結果、1体がキリ属の一種、2体がヤマナラシ属から造像されていることが判明している。

◆法隆寺・東大寺宝物に見られる「イラン文化」：エフタルとソグドの影響について

代表者・影山 悦子 基盤研究 (C) 転入

本研究は、従来の研究によって法隆寺・東大寺宝物に認められている「イラン文化」を再検討し、その影響の源がササン朝ペルシアだけではなく、エフタル支配地域やソグド人の文化にある可能性を考察するものである。

2年目である2015年度は、10月にオリエント学会でこれまでの成果を報告した。2月には、ウズベキスタンのタシケントとサマルカンドを訪れ、3世紀から7世紀の壁画や考古遺物の調査をおこなった。

◆律令制下の土器生産—須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵 基盤研究 (C) 新規

2015年度は、奈良文化財研究所が所蔵している奈良山窯跡、生駒窯跡の須恵器資料および探査資料の整理・分析をおこなった。あわせて、平城京周辺を中心に、これまで発掘調査がおこなわれた8世紀の須恵器窯資料の収集をおこなった。

蛍光X線分析による胎土分析をおこなうため、事前に分析に供する資料の実測図作成と写真撮影をおこなった。その後、試料採取をおこない、蛍光X線分析をおこなった。2015年度、試料採取に供した試料は、龍谷大学付属平安高等学校から提供いただいた陶器窯の試料と木津川市教育委員会から提供いただいた瀬後谷3号窯の資料である。分析の結果は、整理中であるが、蛍光X線分析による産地同定が有効である見通しをえることができた。

◆奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦磚の基礎的研究

代表者・今井 晃樹 基盤研究 (C) 新規

2015年度は、平城京を中心として主に奈良県内で出土している鉛釉陶器・瓦磚の集積とデータベース作成を実施した。平城宮出土の鉛釉陶器と瓦磚の釉薬分析、胎土分析を実施し、生産体制に関わるデータの集積を進めた。また、陶器、瓦磚の分類、実測、製作技法の検討をおこない、平城宮内出土の鉛釉陶器、瓦磚の製作技法、出土分布等の分析、検討をおこなった。

◆古代の灯火—先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤 芳樹 基盤研究 (C) 新規

人類の生活に火は、欠かせない。火は、物質が燃焼するときにおこる化学現象で、その際に熱と光を発する。この熱と光を、生活に活用してきた。本研究は、このうち光にスポットをあてた。

液体油料の活用は、日本列島に寺院と官僚制度を導入するのにもなってもたらされたらしい。灯籠に灯す等仏教の宗教行事を執行する必然と、室内で細かな文字を読み書きする必要からであつたらしい。

2015年度は、各地の考古・民俗資料の調査・検討と情報の収集を精力的におこなうとともに、イギリスでは東アジアの灯明器についての発表をおこなった。さらに、松石聡美氏から、江戸時代に油壺として用いられた備前甕の提供をえた。

◆飛鳥時代金属製品の加工技術に関する基礎的研究

代表者・石橋 茂登 基盤研究 (C) 新規

本研究は、奈良文化財研究所が所蔵・保管する金属製品を対象資料の核として、資料集積と観察にもとづく考古学的な検討、可能な限りの科学分析をおこない、飛鳥時代の金属製品加工技術に関する体系的な解明を目指して基礎的な整理と研究をおこなうものである。

2015年度は、川原寺跡出土品のうちの一部、飛鳥寺跡出土品のうちの一部、長法寺出土の押出三尊仏像および御正体を対象として整理作業や分析をおこなった。川原寺跡、飛鳥寺跡の出土品については継続的に作業をおこなっていききたい。調査成果についてはとりまとめたものから奈文研紀要、論文等で公表する予定である。

◆「復元学」構築のための基礎的研究

代表者・海野 聡 挑戦的萌芽研究 継続

復元に関する研究会を開催し、現地調査として、平安神宮や吉野ヶ里遺跡の調査をおこなった。また発掘遺構の解釈と復元に関する講演をイギリスヨーク大学においておこない、日欧における研究交流の機会をもった。昨年度に引き続き、復元学の構築に向けて、既往の学史的整理をおこない、この成果を日本建築学会の学術講演会において発表した。また本科研の成果を含む著書『奈良時代建築の造営体制と維持管理』（吉川弘文館）を刊行した。

◆考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴地図の開発

代表者・村田 泰輔 挑戦的萌芽研究 新規

本研究は2015年度より3ヶ年で採択された。初年度である2015年度は、「災害痕跡データベース」を構成する情報項目を設定し、研究対象地である奈良県、埼玉県、香川県、鳥取県の計4県の発掘調査事例から、1)位置情報(緯度・経度)、2)基本層序、3)地震、火山噴火、津波に係わる災害痕跡の有無、4)災害痕跡の層位・時代について情報集積をおこない、GISデータベース化を順次進めている。また基本層所、災害痕跡層位、発掘調査区の各地点位置の情報について、RockWorks (RockWare社製)やAutoCAD (AutoDesk社製)を導入することにより、「表層地質断面図」の作成に取り組んでいる。

◆東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古学的研究

代表者・田村 朋美 若手研究 (A)

本研究は、化学分析を通して、日本列島の遺跡から出土する「西のガラス」の生産地を推定し、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易ルートの解明と、その時期変遷をあきらかにすることを目的とする。2015年度は、大阪府風吹山古墳出土品を中心に、日本列島で出土するローマ系のナトロンガラスの化学組成と地中海周辺地域出土品の化学組成を詳細に比較した。その結果、5世紀前半に日本列島に流入した一部のナトロンガラスは現在のイスラエル付近で生産されたガラスであることがあきらかとなった。

◆古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質

代表者・海野 聡 若手研究 (A) 継続

主に国府・国分寺の発掘遺構に関する資料収集をおこない、論攷の準備を進めている。既往の研究を発展させ、東アジア、特に韓国との比較を通して、日本の寺院金堂に関して整理をおこない、成果をまとめた。また中国西安・浙江省周辺の唐・遼・金・元の時代の建物の調査をおこなった。以上の成果を日本建築学会計画系論文集等にて、公表し、この成果を含む著書『奈良時代建築の造営体制と維持管理』（吉川弘文館）を刊行した。

◆甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究

代表者・川畑 純 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、古墳時代の甲冑編年を型式学的な分析視覚から再構築し製作順序を仮定することで、資料の製作順序と一括

資料中における扱いとの間に関連があるのかどうかを明らかにすることである。

2015年度は短甲・頸甲を編年し、衝角付冑・肩庇付冑とあわせて12段階への段階設定をおこない、短甲を中心とする甲冑編年の再構築を達成した。それらをもとに一括資料として複数の甲冑が出土した場合を検討することで、「古相優勢」「近接古相」という扱いの様相があきらかとなった。それらの成果を成果報告書として刊行した。

◆装飾古墳を安定に保存するための環境制御法の開発に関する研究

代表者・脇谷 草一郎 若手研究 (B) 継続

本研究は墳丘封土の被覆状況が異なる3基の装飾古墳を対象として、それらの差異が石室内の結露性状に与える影響を検討し、結露の発生を抑制する墳丘の被覆条件を求めるものである。2015年度は墳丘直上の外界気象条件と石室内湿度の実測調査、結露の発生状況に関する目視観察を継続して実施するとともに、石室保護施設が完成したガランドヤ1号墳において、保護施設の有無による石室内温熱環境と結露性状の差異について検討した。あわせて、石室周辺地盤における熱水分移動の計算をおこない、結露抑制のための換気の運用方法について検討するとともに、現地で実証試験をおこなった。

◆古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究

代表者・小田 裕樹 若手研究 (B) 継続

本研究は、飛鳥時代後半から奈良時代にみられる「律令的土器様式」の成立・展開とその歴史的背景について、東アジア諸国における食器構成と食事作法の変化との比較という観点から明らかにすることを目的とする。

研究3年目にあたる2015年度は、畿内の都城・官衙・集落遺跡出土の一括性の高い土器群の集成と分析および実見調査をおこなった。研究成果の一部については第19回古代官衙・集落研究集会において「飛鳥・藤原・平城地域とその周辺の土器様相」と題する口頭発表をおこなった。また、百済の有蓋台付椀に関する研究論文を執筆した。

◆古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究

代表者・中川 二美 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、磚の生産導入過程をあきらかにし、古代社会の手工業生産体制の一端を解明することである。

2015年度は、昨年度にまとめた須弥壇

を荘厳したと推定される法華寺旧境内出土の施釉磚の検討成果をもとに、資料の展示がおこなわれ公開された。また、引き続き施釉磚を中心に、敷磚としての使用が想定できる資料の検討に着手した。伽藍のなかにおける磚の使用箇所の差を抽出するとともに、裏面に番付をもつ製作段階で使用場所の確定が行われている資料に注目し、検討した。

◆大工道具とその加工痕跡から見た建築技術史の研究

代表者・番 光 若手研究 (B) 継続

本研究は、大工道具の伝世品資料および建築部材に残された加工痕跡から、近世以前の木造建築および部材加工技術の特質についてあきらかにしようとするものである。

2015年度は大工道具の伝世品資料の調査を中心に進めた。オランダ王国ライデン国立民俗博物館に所蔵されている近世末の大工道具（オランダ商館員フィッセル、プロムホフ、およびシーボルト収集）について調査を実施し、近世・近代の他の伝製品大工道具一式との比較検討をおこなった。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題

代表者・恵谷 浩子 若手研究 (B) 継続

2015年度は、昨年度に引き続き各調査報告書・保存計画書を入手して情報収集と整理をおこなった。また、石川県輪島市や長野県飯山市、千曲市等での現地詳細調査を実施するとともに、重要文化的景観の類型化や、調査と価値評価、評価と保存計画の整合性について検討した。

◆近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究—重森編年への検証として

代表者・高橋 知奈津 若手研究 (B) 継続

本研究は、安土桃山時代から江戸時代の寺院や邸宅の庭園を対象に、その構成要素や様式的特徴について詳細に整理・分析することにより、先行の様式編年研究を検証することを目的とする。

2015年度は、昨年度に引き続き先行の編年研究とその対象となった事例の整理・分析を進め、実地調査のための準備をおこなった。

◆古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造にかんする考古学的研究

代表者・諫早 直人 若手研究 (B) 継続

本研究は5・6世紀を中心に東北アジア各地の金工品について調査をおこない、各地の生産体制を復元するとともに、それらを相互に比較することで古代東アジア世界

における金工品の生産と流通の実態をあきらかにすることを目的とする。

2015年度はその2年目にあたり、5世紀の新羅王陵である慶州皇南大塚南墳出土金工品に対する研究成果をまとめ、新羅の初期金銅製品の生産体制に対して一定の見通しを示すことができた。また昨年度から継続して飛鳥寺塔心礎出土品を資料化しており、今年度は馬具について報告をおこなった。

◆七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究

代表者・若杉 智宏 若手研究 (B) 継続

本研究は、飛鳥地域出土の土器と難波地域出土の土器の比較から、7世紀半ば以降の宮都の変遷過程を再検討することを目的とする。

4カ年計画の2年目にあたる2015年度は、昨年度に引き続き飛鳥編年の基準資料である坂田寺池SG100出土土器の再整理作業（実測・個体識別・分量計測・器種構成の把握等）を進めた。

これまでの調査成果の一部は、歴史土器研究会例会にて報告した。

◆九州旧石器編年の再構築と集団関係の研究—中九州石器群の再検討

代表者・芝 康次郎 若手研究 (B) 継続

九州の旧石器時代編年は、その南北で異なる。この違いを、両地域の間にある中九州の石器群を詳細に検討し、他地域と比較することで埋めようとするのが、本研究の主眼である。2年目にあたる2015年度は、阿蘇南外輪山西麓に位置する河原第6遺跡の発掘調査を実施した。調査では後期旧石器時代後半期の石器群の存在を確認した（成果の概要は『九州旧石器』19号にて発表）。また、特に中九州におけるAT直下石器群の検討をおこない、阿蘇周辺石器群にみられる石材消費の特徴をあきらかにした（『北中島西原遺跡』熊本県文化財調査報告にて発表）。

◆古代都城造営における造瓦体制の復元的研究

代表者・石田 由紀子 若手研究 (B) 継続

本研究は、古代都城造営における物資の生産・供給に関するシステムの一端を、瓦を通して解明するものである。2年目となる2015年度は、淡路土生寺瓦窯、讃岐宗吉瓦窯等、遠隔地にある藤原宮所用瓦窯について製作技法や胎土等に注目し、基礎データを収集した。また、平城宮所用瓦窯においても、奈良時代前半に位置づけられる中山瓦窯において1972年の第79-5次調

査より出土した軒瓦等を再検討し、2016年度発行の『紀要2016』において公表する予定である。またこれらの成果の一部は第117回公開講演会や一般講演会等でも広く公開した。

◆荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究 研究代表者・大林 潤 若手研究 (B) 継続

本研究は、寺院建築を中心とした宗教建築における荘厳化を目的とした装飾について建築装飾の技法・年代・地域ごとの体系化をめざし、その建物の使用方法や建築群内での位置づけ等を基準とした荘厳化の内容を解明することを目的とする。育休のため、2016年2月より研究を再開した。2015年度は、奈良県下の文化財建造物の保存修理工事報告書を中心に、装飾に関わる資料を抽出し整理するための準備作業をおこなった。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残渣から、古代における食生活をあきらかにすることである。

2年目にあたる2015年度は、古代の遺跡から出土した動物遺存体を集成するとともに、事例研究として藤原宮跡や平城宮跡から出土した動物遺存体の分析を進めた。平城宮東方官衙地区で検出した廃棄土坑からは、ウニ類、サザエ、クボガイ、コシダカガンガラ等の海産物が出土したことを確認し、ウニは殻付きの状態、海産貝類も貝殻ごと運ばれることがあったことをあきらかにした。こうした研究成果については、紀要や報告書で公表した。

◆中近世における標準年輪曲線の広域ネットワーク整備による木材産地推定

代表者・星野 安治 若手研究 (B) 継続

本研究では、木材移送が盛んになった中近世を中心とした過去約1000年間について、これまで構築した標準年輪曲線ネットワークの空白域である近畿以西の西日本にも拡張する。そして、標準年輪曲線ネットワークの地域区分を日本の全域についてあきらかにし、年輪年代学的手法による木材産地推定を、わが国で応用することを目的とする。研究2年目である2015年度は、昨年度、試料探索した広島、岡山等瀬戸内地域の試料の年輪幅計測に加え、鳥取等日本海地域の木製遺物、建造物古材の試料探索を進めることができた。今後、各地域ごとの標準年輪曲線を構築し、地域間比較を進める予定である。

◆金工品の流通と製作技術伝播からみた古代東アジアにおける地域間交流研究

代表者・稲田 宇大 (金 宇大) 若手研究 (B) 新規

本研究の目的は、古代東アジア、特に古墳・三国時代の日本列島および朝鮮半島における地域間交流の実態を、墳墓に副葬された金工品の分析から解明することである。

2015年度は、日韓両国で出土した垂飾月耳飾と装飾付大刀の実見観察調査を進め、撮影・図化による資料化を集中的におこなった。こうした調査を土台に、耳飾と大刀についての分析を一通りまとめ、これらの金工品をめぐる朝鮮半島での技術交流の様相と日本列島への伝播過程について一定の見解を固めた。その成果の一部を『古代武器研究』vol.7や『文化財と技術』7号に掲載した論文を通じて公表した。

◆古代日本の木簡と古辞書掲出字の字形比較 代表者・井上 幸 奨励研究 新規

日本の古代に書かれた木簡と『新撰字鏡』の掲出字形を比較し、それぞれの相違点を把握して距離をはかることによって、木簡の字形の特徴を記述することを目的とした。およその調査結果としては、例えば各資料で単一字形の場合で一致するのは、一致しないものより圧倒的に多かった。また、『新撰字鏡』に複数掲出されている場合で、字体注記(「二形同」や「俗」)、「古文」等)がある場合についても、一致状況を調整した。この成果の一部は、東アジア日本語教育日本文化研究会(2015年8月22日)で口頭発表した。

◆SfMによる3D手法を利用した風食木簡墨痕明瞭化の研究

代表者・中村 一郎 奨励研究 新規

遺跡出土の木簡を中心として、筆記された墨が様々な理由で消失し、その痕跡のみが盛り上がりとして残るものがある。この痕跡をライティング写真を利用したSfM技術を用いて微地形としてとらえ、痕跡を明瞭化する技術の研究である。

新しい技術であるSfM技術を既存の写真術と組み合わせるために、様々な方面で検討を重ね、実地撮影・研究会発表をおこなった。利用が見込まれる風食木簡は遺跡から多数出土しており、今後の発展が期待される。

◆東アジア都城出土瓦の考古学的研究

代表者・中村 亜希子 特別研究員奨励費 継続

2015年度は、これまでに収集した東京大学考古学研究室所蔵の渤海上京遺跡出土

瓦の三次元計測データをもちいて、当該都城の造営過程を復元した。同范瓦の范傷の進行具合と瓦が出土する遺構の分析によって、現在知られる上京遺跡の郭城が9世紀半ばに出現するとする従来の説とは異なり、9世紀初頭にはその形が完成していたことがあきらかとなった。

また、渤海東京龍原府(八連城遺跡)出土瓦の分析もおこなった。同じ型式の瓦を用いる中京顕徳府(西古城遺跡)出土瓦との比較検討および同范瓦の出土状況から、両遺跡への瓦の供給時期の違い等があきらかになりつつある。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2015年7月10・11日に、第6回(通算27回)文化財写真技術研究会の総会と研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。(参加者延べ145名)

1日目は総会と講演を実施した。

講演「日本写真史のなかの文化財 記録と表現のかたち」(鳥原学氏;写真評論家)。

2日目は、「文化財写真における銀塩フィルム需要とデジタル化の現状について」(勝原潤氏;富士フィルムイメージングシステムズ(株))の報告がなされた後、特集「写真による記録・保存」に移った。まず、趣旨説明を栗山がおこない、続いて「発掘調査における写真記録と保存」(上垣幸徳氏;滋賀県教育委員会)、「整理作業における写真記録と保存」(田邊朋宏氏;福井市文化財保護センター)、「公開活用における写真記録と保存」(高梨清志氏;富山県埋蔵文化財センター)、「博物館における写真記録と保存」(藤瀬雄輔氏;東京国立博物館)と題した発表があり、さらに井上会長を交えてのパネルディスカッションがおこなわれた。特に、「デジタルシフトと写真の記録と保存」をテーマとした討論では、デジタル化が進むにつれ、画像加工の許容範囲等データ補正にまつわる分野で属人的な判断の広がりや垣間見える結果となった。一筋縄ではいかないが、デジタルカメラに即したルールや考え方を整理し、まとめる必要性を感じる機会となった。

なお、特集内容等を掲載した会誌『文化財写真研究』VOL.6も、研究集会開催とあわせて刊行している。(栗山 雅夫)

◆IN-PACEセミナーシリーズ

奈文研と英国のセインズベリー日本藝術研究所(SISJAC)およびロンドン大学オリエント・アフリカ学研究所(SOAS)との共

同企画として、IN-PACE (Internationalizing Nabunken for Promoting Academic and Cultural Exchange between Japan and UK) セミナーシリーズと題し、以下計4回のセミナーを英国内の各地でおこなった。セミナー1 (2015年9月24日、SISJAC、ノリッチ): 神野恵 “Plant Oil Use in Ancient Japan - Focusing on Oil Lamps” (通訳: 表谷静佳)、参加者10名。セミナー2 (2015年11月26日、SOAS、ロンドン): 降幡順子 “Analytical studies for the ancient lead-glazed fragments excavated in Japan”、参加者24名。セミナー3 (2016年1月28日、SOAS、ロンドン): 尾野善裕 “Exoticism in Japanese Ceramics” (通訳: 新堀真理子)、参加者33名。セミナー4 (2016年3月11日、ヨーク大学、ヨーク): 海野聡 “New aspects of Japanese Architectural History based on excavations”、参加者13名。各回にはイギリスで活躍する関連分野の研究者が討論者として参加し、日英の文化財の様々な話題に関する研究交流を深めた。なお、これに続くセミナー5が、2016年5月9日にヨーク大学で開催される予定である。(庄田 慎矢)

◆日本遺跡学会

2015年11月14・15日に、沖縄県立博物館・美術館において、2015年度総会および大会を開催した。今回は沖縄考古学会の協力を得て、共催というかたちでの大会開催となった。大会テーマは「グスク石垣等の復元整備と課題」とした。

初日は、レクチャー・エクスカージョンとして、中城城跡と勝連城跡をまわり、新城卓也氏、渡久地真氏(中城村教育委員会)、横尾昌樹氏(うるま市教育委員会)より報告を受けた。

2日目は、増測徹学会長および眞嗣一大会実行委員長の開催挨拶、盛本勲(沖縄県立埋蔵文化財センター)の趣旨説明の後、眞嗣一の基調講演「沖縄における石垣等の復元整備と課題」のほか、研究発表として高良倉行氏(榊真南風)の「石造拱門事例調査とその構造」、山本正昭氏(沖縄県立埋蔵文化財センター)の「石積みを用いたグスクの特徴について」、下地安広氏(浦添市教育委員会)の「グスク石垣にみる(仮称)力石」、事例発表として玉城寿氏、與那嶺俊氏(今帰仁村教育委員会)の「今帰仁村今帰仁城跡の石垣整備の特徴と課題」、横尾氏の「うるま市勝連城跡も石垣整備の特徴と課題」、新城氏、渡久地氏の「中城村中城城跡の石垣整備の特徴と課題」があった。これら発表を受け、上原静氏(沖縄国際大学)の進行の下に、田中哲雄氏(日本城郭研究センター)、福島駿介

氏(琉球大学)、眞嗣一氏をパネリストとして討論をおこなった。

刊行事業としては、学会誌『遺跡学研究』第12号(特集1:貝塚からの情報、特集2:石切場と地域社会、特集3:「等身大の文化財」の広がり)を発行した。

(前川 歩)

◆木簡学会研究集会

2015年12月5・6日、第37回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した(参加者143名)。

5日は、馬場基「沖縄先島のカイダーデイ文字板について」の研究報告と、横山成己(山口大学)「山口県吉田遺跡の発掘調査と出土音義木簡」の事例報告、6日は山本崇「2015年全国出土の木簡」、梅村大輔(鳥取県埋蔵文化財センター)「鳥取県青谷横木遺跡の発掘調査と出土木簡(続報)」、渡辺晃宏「最近出土の平城宮・京の木簡から」の3本の事例報告があった。会場では例年のように各調査機関のご協力により当該木簡を展示をおこない、実物の即した活発な議論を展開することができた。

なお、会誌『木簡研究』第37号を編集・刊行した(編集担当:馬場基)。(渡辺 晃宏)

◆条里制・古代都市研究会

2016年3月5・6日に平城宮跡資料館講堂において第32回条里制・古代都市研究会を開催した。今回は、「平安時代における都市の変容」をテーマとし、5日は大会報告として山田邦和氏「平安京の都市の変容」、古閑正浩氏「路辺の展開と近京圏」、江口桂氏「平安時代における国府の変容—武蔵国を中心に—」、佐藤泰弘氏「受領の支配と地方の都市」の各報告後、活発な質疑応答が交わされた。6日は、まず調査レポートとして、鈴木一議氏「藤原京右京十一坊二坊における発掘調査とその成果」、原田憲二郎氏「平城京左京五条四坊の調査」、千葉太朗氏「大園遺跡とその周辺の調査成果からみた古代和泉」、道田賢志氏「備後国府跡の調査成果」、永井智教氏「関東地方北西部における条里水田開発—近年発見された大溝を中心とした考古学的検討—」、続いて研究報告として井上和人氏「唐長安城(隋大興城)形制規格復元試論」の各報告後、質疑応答があった。いずれの報告も大変充実した有意義な大会となった。(青木 敬)

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

2014年度に引きつづき、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言をおこなった。

平城宮跡内では、第一次大極殿院の復原工事にとまなう進入路設置のため、大極殿院を囲っていた修景柵を撤去したのにあわせて、これまで未調査であった西面回廊中ほどの発掘調査をおこなった(第561次)。

また、国土交通省が整備をおこなう史跡朱雀大路跡について、朱雀大路西側溝および平城京右京三条一坊一・二坪にあたる工場跡地で発掘調査をおこなった(第552次; いずれも『奈文研紀要2016』参照)。そのほか、朱雀門南東の平城宮跡展示館建設地、東北官衙地区に建設している第一次大極殿院地区の復原にとまなう現場事務所等の仮設建物、第一次大極殿院復原のための資材保管庫等の仮設建物への各種配管、通称みやと通りに接する宮内園路の舗装改修等の工事について、立会調査で対応した。

いっぽう、文化庁が計画した平城宮跡内における高圧配電線路設備の改修、および東院庭園の池水のための深井戸ポンプ改修、遺構展示館南棟の雨水排水設備改修、同駐車場の舗装改修、同警備員詰所の改修、佐紀池北部のネットフェンス改修、内裏・大膳職・内膳司等の遺構表示のためのツゲの補植、等にとまなう工事に対し、立会調査で対応した。

2010年度から進めている第一次大極殿院の復原研究では、所内検討会を3回開催した。このうち2回は飾金具に関する検討である。もう1回は、大極殿院の学術発掘調査にとまなう現地で開催した。これまでの大極殿院東半の発掘調査では、奈良時代前半に遡る可能性のある井戸状遺構が検出されていた。南北中軸線の対称位置に同様の遺構の有無の確認と、その時期の確定を目的として、第551次調査をおこなった(調査成果は『奈文研紀要2016』参照)。



第一次大極殿院の発掘現場における復原検討会(2015年9月18日開催)

奈良時代前半の井戸であれば、現在進めている大極殿院の復原へ反映させる必要がある。調査の結果、東西対称の位置に巨大な土坑を確認したが、その性格と時期については特定できなかった。検討会では、大極殿と併存していた確証はないとの結論に達し、復原整備はおこなわないこととした。

(箱崎 和久)

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

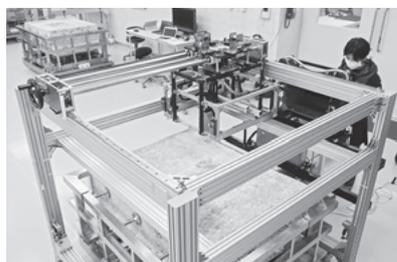
高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業が実施されている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、材料、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

2014年度は劣化原因調査および修復のための継続的な調査として、東壁2の青龍および日像の可視分光分析をおこなった。青龍および日像において37点の分析箇所から可視反射スペクトルおよび近赤外反射スペクトルを取得した。緑色部の可視分光スペクトルは緑青のそれとよい一致を示している。また、赤色部については、水銀朱のスペクトルとよい一致をしている。漆喰層の劣化状態を把握するため、東壁2（青龍）のテラヘルツ波イメージング調査を実施した。今年度より、国産メーカー（パイオニア株式会社）製のTHzイメージング装置を用いた。その結果、漆喰がきわめて堅牢な部分では、漆喰表面での強い反射のみが観測されるのに対し、漆喰が石材から浮いている部分では、石材との境界での反射が観測された。また、高松塚古墳の漆喰には上部から下垂したように見える灰色の物質が観察されている。この灰色部分において強いTHz波の反射を観測することができた。この灰色の物質については、これまで材料的な特徴が全く捉えられていなかったが、今回、THz波の反射が強いという特徴を捉えることができたことは、この灰色物質の材料調査の端緒となる情報となりうることを期待できる。

経年変化の記録撮影として、東壁3石、西壁3石、ならびに天井石4石に対して、デジタルアーカイブスキャナによる高精細画像を撮影した。撮影は各石材漆喰面に対し、可視光と赤外光で実施した。また、紫外線スキャニングについては、スキャニングの安全性を確認するための試験をおこない、紫外線スキャニングの色料におよぼす影響を検討した。

昨年度に引き続き、可搬型X線回折装置の検討をおこなった。今年度は、二次元イ

メージング検出器を用いた装置の開発をおこなった。このシステムを用いることで、バックグラウンドの排除、高分解能化、高強度化、ならびに角度精度の向上を期待できるものと考えられる。(高妻 洋成)



高松塚古墳壁画

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係の事業では、墳丘整備の調査と、保存科学調査、古墳の活用に関わる事業を実施した。

墳丘整備においては、2015年4月から7月にかけて、立会調査をおこなった。立会調査では、遺構へ影響がおよばないよう作業内容に注意を払い、必要に応じ、作業方法の変更等を指示し、墳丘整備は無事完了した。

墳丘整備前の記録として、墳丘部分の3次元レーザー測量を実施した。また、墳丘整備後にも墳丘および周辺地形の3次元レーザー測量を実施し、あわせて2015年10月22日に整備竣工状況の空撮とハイライダーによる撮影をおこなった。

保存科学調査では、2004年の発掘調査時に石室内から出土した骨片のうち、報告書未掲載の小破片資料について、クリーニング・樹脂による仮強化処理・仮保管ケースの作成を継続しておこなっており、本年度は約19箱分の資料について実施した。また、出土した遺物の点検作業をおこなうとともに、温度湿度のモニタリング、調湿剤等の交換作業を実施した。

発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、発掘調査の三次元動画作成準備をおこなった。

また、国営飛鳥歴史公園（キトラ周辺地区）内に建設予定の体験学習館の展示内容につき、会議に11回出席し、資料提供と助言をおこなった。(玉田 芳英)



整備が完了したキトラ古墳（東南から）

現地説明会・見学会

◆平成27年10月12日（月・祝）

飛鳥藤原第186次（藤原宮大極殿院）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
研究員 清野 陽一
参加者1,112人 調査面積1548㎡

◆平成27年11月21日（土）

東大寺東塔院跡
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
参加者1,897人 調査面積713㎡

◆平成27年12月20日（日）

平城第559次調査（興福寺中室・経蔵・鐘楼）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（平城地区）
史料研究室 桑田 訓也
参加者1,200人 調査面積835.5㎡

◆平成28年3月5日（土）

平城第552次調査（平城京朱雀大路跡）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第二研究室 丹羽 崇史
参加者680人 調査面積756㎡



藤原第186次 現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2015年度は、専門研修13課程と特別研修2課程を実施した（2015年度文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数91日、研修生総数177名であった。

各部・センターでは、要請に従って地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2015年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物依存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、小野健吉（庭園史学、文化的景観学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）、高妻洋成（保存科学）、尾野善裕（考古学）の6名がそれぞれ

れの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2014年度には、修士課程1名、博士後期課程4名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の2年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、杉山洋（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した埴塼や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践した。

奈良大学への教育協力

2014年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備に関する制度・歴史・理念・手法等について、体系的に講義をおこない、平城宮跡における学外授業を実施した。

2015年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	(滋賀) 敏満寺石仏谷墓跡 日吉神社境内 胡宮神社社務所庭園 多賀大社奥書院庭園 慶雲館庭園 延暦寺根本中堂	(岡山) 野町伝統的建造物群 出雲国府跡 三瓶小豆原埋没林 大田市伝統的建造物群
(岩手) 御所野遺跡 志波城跡	(京都) 元離宮二条城 宇治川太閤堤跡 恭仁宮跡 對龍山荘庭園 大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	(徳島) 備中松山城跡 高梁市伝統的建造物群 津山市伝統的建造物群
(宮城) 多賀城跡 おくのほそ道の風景地「壺碑・興井・末の松山」	(大阪) 百済寺跡 鳥坂寺跡 旧西尾家住宅 日根野荘遺跡 高安千塚古墳 古市古墳群 百舌鳥古墳群 飯盛城跡 太子町国史跡二子塚古墳 難波宮跡	(広島) 廉塾ならびに官茶山旧宅
(秋田) 脇本城跡 横手市伝統的建造物群	(兵庫) 赤穂城跡 五斗長垣内遺跡 加茂遺跡	(徳島) 勝瑞城跡 阿波国分尼寺跡
(福島) 宮畑遺跡 宮脇廃寺跡	(奈良) 旧大乘院庭園 中宮寺跡 巢山古墳 唐古・鍵遺跡 菖蒲池古墳 東大寺境内 薬師寺東塔 香芝市史跡 鳥の山古墳 橿原市伝統的建造物群 纏向遺跡 春日古墳 法隆寺金堂壁画	(香川) 屋嶋城跡 快天山古墳 丸亀城跡 讃岐国府跡 丸亀市伝統的建造物群
(群馬) 上野国分寺跡 金井東裏遺跡 上野国佐位郡正倉跡	(和歌山) 紀伊山地の霊場と参詣道 根来寺境内	(愛媛) 永納山城跡
(神奈川) 円覚寺庭園白鷺池	(鳥取) 青谷上寺地遺跡 大高野官衙遺跡	(福岡) 大宰府史跡 鴻臚館跡 三雲・井原遺跡 大宰府跡推定客館地区 福原長者原遺跡
(石川) 金沢城 旧松波城庭園 真脇遺跡 金沢城鼠多門等	(鳥根) 旧堀氏庭園 出雲大社境内遺跡 津和	(佐賀) 肥前陶器窯跡 三重津海軍所跡
(福井) 朝倉氏遺跡 金ヶ崎城跡		(長崎) 鷹島海底遺跡 高島炭鉱
(岐阜) 正家廃寺跡 大萱古窯跡群 郡上市伝統的建造物群 岐阜城跡		(熊本) 西南戦争遺跡 堅志田城跡
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡		(大分) ガランドヤ古墳
(愛知) 鳥原藩主深溝松平家墓所 尾張国分寺跡		(宮崎) 日向国府跡 蓮ヶ池横穴群
(三重) 伊勢国分寺跡 齋宮跡 長谷川家 松坂城跡 諸戸家住宅 諸戸氏庭園		

2015年度 文化財担当者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修 日数	応募 者数	受講 者数
専 門 研 修	建築遺構 調査課程	6月8日 ～ 6月12日	12	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土建築部材に関して必要な上部構造の専門的知識や発掘方法等についての研修。	遺構研究室	5	8	8
	災害痕跡 調査課程	6月15日 ～ 6月19日	10	〃	地震、津波、火山等の災害痕跡を理解するための専門的知識と調査方法を取得することを目的とした研修。	環境考古学 研究室	5	8	8
	建造物保存活用 基礎課程	6月22日 ～ 6月26日	15	〃	文化財建造物の保護行政をおこなうための文化財建造物に関する基礎、および文化財建造物の保存・活用に関する基礎の習得を目指す研修。	建造物研究室	5	21	20
	報告書作成Ⅰ (編集基礎) 課程	7月6日 ～ 7月10日	10	〃	文化財調査に必要な不可欠な報告書等の出版物制作にあたって、編集に必要な基礎知識と印刷工程の基礎知識についての研修。	企画調整室	5	26	14
	報告書作成Ⅱ (応用制作) 課程	7月13日 ～ 7月17日	10	〃	報告書等の出版物制作にあたり、実際の編集作業に必要な知識や技術、特にデジタル編集の実習を通じて制作のノウハウを学べる研修。	企画調整室	5	19	10
	自然科学的 年代測定法	7月21日 ～ 7月24日	10	〃	年輪年代や放射性炭素年代等自然科学的年代測定の基礎知識を平易に解説し、文化財調査に積極的に取り入れるための留意点等の習得を目指す研修。	年代学研究室	4	2	0
	遺跡情報 記録調査課程	9月8日 ～ 9月11日	15	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存活用手法として、GISやデータベースの利用、遺跡情報の公開に関する知識の取得を目指す研修。	文化財情報 研究室	5	10	10
	木器・木製品 調査課程	9月14日 ～ 9月18日	15	〃	発掘調査において出土した木器・木製品の整理、調査、保管について、必要な専門知識と技術の習得を目的とする研修。	考古第一研究室	5	11	11
	三次元計測課程	9月28日 ～ 10月2日	10	〃	三次元計測の利用に関して必要な専門知識と技術の習得を目指した研修。	遺跡・調査 技術研究室	5	9	9
	保存科学Ⅰ 基礎(金属製遺物) 課程	10月6日 ～ 10月15日	10	〃	金属製遺物の材質および劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、金属製遺物の材質および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする研修。	保存修復科学 研究室	10	6	6
	保存科学Ⅱ 基礎(木製遺物) 課程	10月15日 ～ 10月23日	10	〃	木製遺物の樹種、木取り、および劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、木製遺物の劣化状態および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする研修。	保存修復科学 研究室	9	6	6
	文化財写真課程	12月8日 ～ 12月18日	15	〃	文化財の記録の中核をなす記録写真撮影について、様々な文化財分野の写真についての基礎知識と実習による実技を習得できる研修。	写真室	11	13	13
	遺跡等環境 整備課程	1月12日 ～ 1月22日	12	〃	遺跡整備に関する講義および整備計画立案の演習を通して、遺跡整備の実施にあたって必要となる基礎的な知識の習得を目指す研修。	遺跡整備研究室	11	14	14
保存科学Ⅲ (応急処理) 課程	2月15日 ～ 2月19日	10	〃	発掘調査において出土した脆弱遺物の取り上げ、保存処理までの一時保管法等の遺物の取り扱いに関する応急処置について、講義と実習を通して習得することを目的とする研修。	保存修復科学 研究室	5	9	9	
特 別 研 修	三次元 ワークショップ	1月16日 ～ 1月17日	-	〃	SfM/MVSを用いた考古資料の三次元計測について、利用事例や利用方法の紹介を通じてその手法の有効性の検討や利用の普及を進めていくことを目的とする。	遺跡・調査技術 研究室	2	23	23
	埋蔵文化財 デジタル写真研修	3月8日 ～ 3月11日	-	〃	フィルム写真記録からデジタル写真環境への移行に対応するために必要な基礎的な知識、技術、設備、文化財担当部局・担当者の考え方について研修する。	写真室	4	16	16

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「はじまりの御仏たち」

2015年4月24日～6月21日

出土品を中心に飛鳥時代のさまざまな小仏像を展示。各種仏像の製作と用途、寺院における荘厳も紹介した。会期59日間。来館者数10,725人。大脇潔氏による記念講演会「埴仏学研究最前線—奉獻から荘厳・三尊から群像へ—」（参加88人）を開催し、ギャラリートークを5回実施した。図録第62冊『はじまりの御仏たち』刊行。

◆夏期企画展 第6回写真コンテスト応募作品展「ひさかたの天—いにしへの飛鳥を想ふ—」

2015年7月28日～9月13日

「空」をテーマに募集した作品181点を展示し、優秀作品を選出した。写真教室「デジタル写真の上質仕上げ」を開催した（参加8人）。入賞作品を配した「うちわ」を作成し会場で配布した。会期41日間。来館者数4,088人。

◆秋期特別展「キトラ古墳と天の科学」

2015年10月9日～11月29日

文化庁・奈良文化財研究所が主催。開館40周年記念として第1展示室を会場とした。キトラ古墳天文図と古代の天の科学を紹介した。会期53日間。来館者数12,862人。高柳雄一氏、中村士氏、相馬充氏、眞木隆志氏と石橋・若杉が講師、文化庁建石氏と玉田が司会を務めて講演会「キトラ古墳と天の科学」を開催した（参加126人）。ギャラリートークを4回実施した。関連イベント「古代人が見た星宙～キトラ古墳に学ぶ天文学のすすめ」（朝日新聞・文化庁・奈良文化財研究所主催）、「プラネタリウムで考古学～キトラ古墳の星空が語るもの～」（多摩六都科学館・奈良文化財研究所主催）を開催した。図録第63冊『キトラ古墳と天の科学』刊行。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2015—飛鳥の古墳調査最前線—」

2016年1月15日～3月6日

飛鳥資料館・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村が主催。飛鳥の終末期古墳にスポットを当て、最新の調査成果を含めて紹介した。会期33日間。来館者数2,504人。カタログ第33冊『飛鳥の考古学2015』刊行。

このほか、明日香村観光活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加し、夜間無料開館を実施した（2015年8月29～30日、夜間来館121人）。また第1展示室の常設展示を一部刷新した。

平城宮跡資料館の展示

◆夏期企画展「平城京“ごみ”ずかん—ごみは宝—」

2015年7月11日～9月23日

平城宮・京跡で出土したものの中から、不要になって捨てられたものについて紹介する展示。夏休み期間中の親子連れを意識して、平城京の人々が捨てたごみはどんなもの？、ごみすて場をのぞいてみよう！、天平のリサイクル術等、親しみやすい展示構成とした。会期中の入館者数は18,108名で、ギャラリーイベントとして「ゴミドコさんとハカセの“ごみ”トーク」を5回（参加者計150名）、親子ワークショップを1回（参加者計76名）をおこなった。



ゴミドコさんとハカセの“ごみ”トークの様子

◆秋期特別展「地下の正倉院展 造酒司木簡の世界」

2015年10月17日～11月29日

年に一度の木簡実物の公開展示。本年、平城宮跡造酒司（酒や酢の醸造をつかさどる役所）より1964年から65年にかけての発掘調査で出土した木簡568点が国の重要文化財に指定されたことを記念し、新指定の木簡を展示した。また、酒づくりを中心とする造酒司での様々な日常業務の様子等、数次にわたる発掘調査や研究の成果も紹介した。会期中3回、研究員によるギャラリートークをおこなった（参加者150名）。会期中の入館者数は16,830名であった。

2015年度 入館者数

飛鳥資料館（有料） 観覧料の詳細は63頁	平城宮跡資料館（無料）	合計
42,749人	105,334人	148,083人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2016年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は133名を数え、平均して一人当たり1ヶ月に2～3日のガイド活動をおこなっている。

2015年度における活動については、定点5カ所の

解説を中心に、予約受付した来場者への宮跡内ツアーガイドを充実させた。

奈良文化財研究所としては、平城宮跡を広く一般に理解してもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の提供等積極的な支援をおこなった。



研修機会等の提供等積極的な支援をおこなった。

2015年「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数 306日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
19,403人	21,630人	7,553人	17,104人	7,733人	6,984人	80,407人	3,777人

*活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2016.3.31現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、仮庁舎図書資料室においても一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、PDF化をおこない、インターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧	2015年度アクセス件数
木簡データベース	30,266
木簡画像データベース	35,361
木簡画像データベース〈韓国語版〉	1,315
木簡画像データベース〈中国語版〉	5,685
木簡画像データベース〈英語〉	672
木簡字典くずし字典連携検索	218,803
墨書土器字典	1,798
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,194
遺跡データベース	6,536
古代地方官衙関係遺跡データベース	2,094
古代寺院遺跡データベース	2,615
古代地名検索システム	4,694
官衙関係遺跡整備データベース	412
遺跡の斜面保護データベース	331
発掘庭園データベース	1,043
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	541
所蔵図書データベース	18,413
報告書抄録データベース	5,520
考古関連雑誌論文情報補完データベース	1,971
薬師寺典籍文書データベース	755
大宮家文書データベース	281
平城京出土陶硯データベース	453
学術情報リポジトリ	44,899
全国遺跡報告総覧	757,143

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所 学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)
 第2冊 修学院離宮の復元的研究 (1954)
 第3冊 文化史論叢 (1954)
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1957)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1958)
 第6冊 中世庭園文化史 (1959)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1959)
 第8冊 文化史論叢 I (1960)
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1960)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1961)
 第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究— (1962)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶 (1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究 (1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告 II
官衙地域の調査 (1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告 III
内裏地域の調査 (1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
官衙地域の調査 (1966)
 第18冊 小堀遠州の作事 (1966)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家 (1968)
 第20冊 名物烈の成立 (1970)
 第21冊 研究論集 I (1972)
 第22冊 研究論集 II (1974)
 第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
平城京左京一条三坊の調査 (1975)
 第24冊 高山一町並調査報告— (1975)
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
内裏北外郭の調査 (1976)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I (1976)
 第28冊 研究論集 III (1976)
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1976)
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1977)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II (1978)
 第32冊 研究論集 IV (1978)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1978)
 第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
 宮城門・大垣の調査 (1978)
 第35冊 研究論集 V (1979)
 第36冊 平城宮整備調査報告 I (1979)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III (1980)
 第38冊 研究論集 VI (1980)
 第39冊 平城宮発掘調査報告 X
古墳時代 I (1981)
 第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
第一次大極殿地域の調査 (1982)
 第41冊 研究論集 VII (1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
馬寮地域の調査 (1985)
 第43冊 日本における近世民家 (農家) の系統的発展 (1985)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1986)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1987)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1989)
 第47冊 研究論集 VIII (1989)
 第48冊 年輪に歴史を読む
—日本における古年輪学の成立— (1990)
 第49冊 研究論集 IX (1991)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書 XIII
内裏の調査 II (1991)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書 XIV
平城宮第二次大極殿院の調査 (1993)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1993)
 第53冊 平城宮朱雀門の復元的研究 (1994)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告 (1995)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV
—飛鳥水落遺跡の調査— (1995)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡 (1999)
 第58冊 研究論集 X (1999)
 第59冊 中世瓦の研究 (2000)
 第60冊 研究論集 XI (1999)
 第61冊 研究論集 XII (2001)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2001)
 第63冊 山田寺発掘調査報告 本文編
図版編 (2002)
 第64冊 研究論集 XIII (2002)
 第65冊 文化財論叢 III 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集 (2002)

- 第66冊 研究論集XV (2003)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編 [法華寺南遺跡] (2003)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査 (2003)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査 (2003)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査 (2005)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告 I (2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告 I
石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査 (2005)
- 第73冊 タニ窯跡 A6号窯跡発掘調査報告書 (2005)
- 第74冊 古代庭園研究 I (2006)
- 第75冊 研究論集 XV (2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告 (2007)
- 第77冊 日韓文化財論集 I (2008)
- 第78冊 近世瓦の研究 (2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 I
基壇・礎石 (2009)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 IV
瓦・屋根 (2009)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 II
木部 (2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 III
彩色・金具 (2010)
- 第83冊 研究論集16 (2010)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査 2 本文編/図版編 (2011)
- 第85冊 漢長安城桂宮 報告編・論考編 (2011)
- 第86冊 研究論集17
平安時代庭園の研究—古代庭園研究 II— (2011)
- 第87冊 日韓文化財論集 II (2011)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告
—アンコール文化遺産保護共同研究報告書— (2011)
- 第89冊 四万十川流域 文化的景観研究 (2011)
- 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report
on Joint Research for the Protection of the
Angkor Historic Site (2012)
- 第91冊 遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究 (2012)
- 第92冊 文化財論叢 IV 奈良文化財研究所 創立六十
周年記念論文集 (2012)
- 第93冊 奈良山発掘調査報告 II—歌姫西須恵器窯の調
査— (2014)
- 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 V—藤原京左京六
条三坊の調査— (2015)
- 第95冊 日韓文化財論集 III (2015)
- 第96冊 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代— (2015)

奈良文化財研究所 史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1955)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成 (1956)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編 I (1964)
- 第4冊 俊乗房重源伝記集成 (1965)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版 (1966)
解説 (1969)
(平城宮発掘調査報告 V)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2 (1968)
- 第7冊 唐招提寺史料 I (1971)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版 (1975) 解説 (1975)
(平城宮発掘調査報告 VIII)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1975)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1976)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1977)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説 (1978)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1978)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1979)
- 第15冊 東大寺文書目録第1巻 (1979)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 (1981)
- 第18冊 藤原宮木簡二 (1981)
- 第19冊 東大寺文書目録第2巻 (1981)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第1巻 (1981)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1982)
- 第23冊 東大寺文書目録第4巻 (1982)
- 第24冊 東大寺文書目録第5巻 (1983)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1983)
- 第26冊 東大寺文書目録第6巻 (1984)
- 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— (1985)
- 第28冊 平城宮木簡四 (1986)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻 (1986)
- 第30冊 山内清男考古資料 1 (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料 2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料 3 (1992)
- 第34冊 山内清男考古資料 4 (1992)
- 第35冊 山内清男考古資料 5 (1992)
- 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— (1993)

- 第37冊 梵鐘実測図集成（上）（1993）
 第38冊 梵鐘実測図集成（下）（1993）
 第39冊 山内清男考古資料6（1993）
 第40冊 山田寺出土建築部材集成（1995）
 第41冊 平城京木簡一（1995）
 第42冊 平城宮木簡五（1996）
 第43冊 山内清男考古資料7（1996）
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻（1996）
 第45冊 北浦定政関係資料（1997）
 第46冊 山内清男考古資料8（1997）
 第47冊 北魏洛陽永寧寺（1998）
 第48冊 発掘庭園資料（1998）
 第49冊 山内清男考古資料9（1998）
 第50冊 山内清男考古資料10（1999）
 第51冊 山内清男考古資料11（2000）
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法（2000）
 第53冊 平城京木簡二 長屋王家木簡二（2001）
 第54冊 山内清男考古資料12（2000）
 第55冊 法隆寺古絵図集（2001）
 第56冊 法隆寺考古資料（2002）
 第57冊 日中古代都城図録（2002）
 第58冊 山内清男考古資料13（2002）
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
 第60冊 平城京条坊総合地図（2003）
 第61冊 鞏義黄冶唐三彩（2003）
 第62冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉一（2003）
 第63冊 平城宮木簡六（2004）
 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
 第65冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉二（2004）
 第66冊 山内清男考古資料14（2004）
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻（2004）
 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編（2004）
 第69冊 平城京漆紙文書（一）（2004）
 第70冊 山内清男考古資料15（2005）
 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ 朝鮮・日本編
 （2005）
 第72冊 畿内産土師器集成西日本編（2005）
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
 第74冊 山内清男考古資料16（2006）
 第75冊 平城京木簡三 二条大路木簡Ⅰ（2006）
 第76冊 評制下荷札木簡集成（2006）
 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
 第78冊 黒草紙・新黒双紙（2007）
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説（2007）

- 第80冊 平城京出土陶硯集成Ⅱ 平城京・寺院（2007）
 第81冊 高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
 第83冊 興福寺典籍文書目録（2009）
 第84冊 山内清男考古資料17（2009）
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説（2010）
 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
 第88冊 藤原宮木簡三 図版・解説（2012）
 第89冊 仁和寺史料 古文書編一（2013）
 第90冊 大宮家文書調査報告書（2014）

奈良文化財研究所 研究報告

- 第1冊 文化的景観研究集会（第1回）報告書（2009）
 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
 第3冊 古代東アジアの造瓦技術（2010）
 第4冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
 第5冊 文化的景観研究集会（第2回）報告書（2010）
 第6冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
 第7冊 文化的景観研究集会（第3回）報告書（2011）
 第8冊 鞏義白河窯の考古新発見（2011）
 第9冊 古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
 第10冊 文化的景観研究集会（第4回）報告書（2012）
 第11冊 河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）
 第12冊 奈良文化財研究所研究報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
 第13冊 文化的景観研究集会（第5回）報告書（2013）
 第14冊 古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編／資料編（2014）
 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器Ⅰ（2015）
 第16冊 キトラ古墳天文図 星座写真資料（2015）
 第17冊 藤原宮跡出土馬の研究（2015）

奈良文化財研究所 基準資料

- 第1冊 瓦編Ⅰ 解説（1974）
 第2冊 瓦編Ⅱ 解説（1975）
 第3冊 瓦編Ⅲ 解説（1976）
 第4冊 瓦編Ⅳ 解説（1977）
 第5冊 瓦編Ⅴ 解説（1977）
 第6冊 瓦編Ⅵ 解説（1979）
 第7冊 瓦編Ⅶ 解説（1980）
 第8冊 瓦編Ⅷ 解説（1981）

第9冊 瓦編9 解説 (1984)

飛鳥資料館 図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文編 (1977)
 第3冊 日本古代の墓誌 (1977)
 第4冊 日本古代の墓誌 銘文編 (1978)
 第5冊 古代の誕生仏 (1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺— (1979)
 第7冊 日本古代の鴟尾 (1980)
 第8冊 山田寺展 (1981)
 第9冊 高松塚拾年 (1982)
 第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺— (1983)
 第11冊 飛鳥の水時計 (1983)
 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで— (1984)
 第13冊 藤原—半世紀にわたる調査と研究— (1984)
 第14冊 日本と韓国の塑像 (1985)
 第15冊 飛鳥寺 (1985)
 第16冊 飛鳥の石造物 (1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住 (1987)
 第18冊 壬申の乱 (1987)
 第19冊 古墳を科学する (1988)
 第20冊 聖徳太子の世界 (1988)
 第21冊 仏舎利埋納 (1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 (1989)
 第23冊 日本書紀を掘る (1990)
 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する—考察 (1991)
 第25冊 飛鳥の源流 (1991)
 第26冊 飛鳥の工房 (1992)
 第27冊 古代の形 (1995)
 第28冊 蘇我三代 (1995)
 第29冊 斉明紀 (1996)
 第30冊 遺跡を測る (1997)
 第31冊 それからの飛鳥 (1998)
 第32冊 UTAMAKURA (1998)
 第33冊 幻のおおでら—百濟大寺 (1998)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として (1999)
 第35冊 あすかの石造物 (2000)
 第36冊 飛鳥池遺跡 (2000)
 第37冊 遺跡を探る (2001)
 第38冊 ‘あすか—以前’ (2002)
 第39冊 A0の記憶 (2002)
 第40冊 古年輪 (2003)
 第41冊 飛鳥の湯屋 (2004)
 第42冊 古代の梵鐘 (2004)
 第43冊 飛鳥の奥津城—キトラ・カラト・マルコ・高

松塚 (2005)

- 第44冊 東アジアの古代苑池 (2005)
 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち (2006)
 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武 (2007)
 第47冊 奇偉莊嚴山田寺 (2007)
 第48冊 キトラ古墳壁画十二支—子・丑・寅— (2008)
 第49冊 まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯の考古新発見— (2008)
 第50冊 キトラ古墳壁画四神—青龍白虎— (2009)
 第51冊 三燕文化の考古新発見—北方騎馬民族のかがやき— (2009)
 第52冊 キトラ古墳壁画四神 (2010)
 第53冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第54冊 星々と日月の考古学 (2011)
 第55冊 飛鳥遺珍—のこされた至宝たち— (2011)
 第56冊 比羅夫がゆく—飛鳥時代の武器・武具・いくさ— (2012)
 第57冊 花開く都城文化 (2012)
 第58冊 飛鳥寺2013 (2013)
 第59冊 飛鳥・藤原京への道 (2013)
 第60冊 いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代— (2014)
 第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶— (2014)
 第62冊 はじまりの御仏たち (2015)
 第63冊 キトラ古墳と天の科学 (2015)

飛鳥資料館 カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道 (1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品 (1975)
 第3冊 飛鳥の仏像 (1978)
 第4冊 桜井の仏像 (1979)
 第5冊 高取の仏像 (1980)
 第6冊 檀原の仏像 (1981)
 第7冊 飛鳥の王陵 (1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺— (1985)
 第9冊 高松塚の新研究 (1992)
 第10冊 飛鳥の一と—最近の調査から— (1994)
 第11冊 山田寺 (1996)
 第12冊 山田寺東回廊再現 (1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ (2001)
 第14冊 古墳を飾る (2005)
 第15冊 うずもれた古文書—みやこの漆紙文書の世界— (2006)
 第16冊 飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相 (2006)

- 第17冊 飛鳥の考古学2006 (2007)
- 第18冊 「とき」を撮す—発掘調査と写真— (2007)
- 第19冊 飛鳥の考古学2007 (2008)
- 第20冊 飛鳥の考古学2008 (2009)
- 第21冊 飛鳥の考古学2009 (2010)
- 第22冊 小さな石器の大きな物語 (2010)
- 第24冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
- 第24冊 飛鳥の考古学2010 (2011)
- 第25冊 鑄造技術の考古学—東アジアにひろがる鑄物師のわざ— (2011)
- 第26冊 飛鳥の考古学2011 (2012)
- 第27冊 飛鳥の考古学2012 (2013)
- 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する (2013)
- 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍 (2014)
- 第30冊 飛鳥の考古学2013 (2014)
- 第31冊 大和の美仏に魅せられて (2014)
- 第32冊 飛鳥の考古学2014 (2014)
- 第33冊 飛鳥の考古学2015 (2015)

- ・『地下の正倉院展 造酒司木簡の世界』
- ・ミニ展示『発掘速報展平城2015 第I期』
- ・ミニ展示『発掘速報展平城2015 第II期』
- ・ミニ展示『すごろく土器がみつかった!』
- ・『飛鳥寺跡出土遺物の研究 ガラス玉類の考古科学的研究』飛鳥資料館研究図録第19冊
- ・『東アジア古代寺址比較研究(Ⅱ)—金堂址編—』
- ・『史跡等の整備・活用の長期的な展開—経年によるソフト・ハードの変化と再生—』平成26年度遺跡整備・活用研究集会報告書
- ・『地域のみかた—文化的景観学のすすめ』文化的景観スタディーズ第1冊
- ・『Lectures from the International Research Exchange between Nara National Research Institute for Cultural Properties and Columbia University, 2011-2015』奈良文化財研究所とコロンビア大学との研究交流事業における研究発表論文集 2011-2015
- ・『平城宮跡整備報告書』
- ・『坂田寺出土建築部材調査報告書』
- ・文化的景観資料集成第2集 文化的景観保存計画の概要(Ⅱ)
- ・文化的景観資料集成第3集 文化的景観保存計画の概要(Ⅲ)
- ・『8世紀の瓦づくりV—東大寺式軒瓦の展開—』第16回シンポジウム発表要旨集
- ・『Annual Report on the Research and Restoration Work of the Western Prasat Top Mantling Process of the Southern Sanctuary』西トップ遺跡調査修復報告中間報告3 南祠堂再構築編

その他の刊行物 (2015年度)

- ・奈良文化財研究所紀要2015
- ・奈文研ニュースNo.57~60
- ・埋蔵文化財ニュースNo.162~165
- ・『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』奈良文化財研究所特別講演(東京会場)講演録
- ・「ひさかたの天—いにしへの飛鳥を想ふ—」第6回写真コンテスト展うちわ
- ・『平城京“ごみ”ずかん—ごみは宝—』

人事異動 (2015. 4. 1~2016. 3. 31)

●2015年4月1日付け
 研究支援推進部長 島田健治
 研究支援推進部総務課長 臣守常勝
 研究支援推進部連携推進課長 津田保行
 研究支援推進部連携推進課課長補佐(兼)研究支援推進部連携推進課広報企画係長(兼)研究支援推進部連携推進課係長 梶原孝次
 研究支援推進部総務課財務係 北村加奈
 研究支援推進部研究支援課官跡等活用支援係主任 三本松俊徳
 都城発掘調査部長 玉田芳英
 都城発掘調査部副部長 渡邊晃宏(兼)都城発掘調査部史料研究室長(兼)文化遺産部景観研究室長 林良彦
 文化遺産部遺跡整備研究室長 内田和伸
 東京文化財研究所無形文化遺産部主任研究員 石村智

都城発掘調査部主任研究員 林正憲
 企画調整部展示企画室研究員 若杉智宏(兼)飛鳥資料館学芸室 文化遺産部建造物研究室研究員 番光
 都城発掘調査部考古第二研究室研究員 丹羽崇史
 都城発掘調査部遺構研究室研究員 海野聡
 都城発掘調査部考古第三研究室 アソシエイトフェロー 山本亮
 都城発掘調査部遺構研究室 アソシエイトフェロー 福嶋啓人
 埋蔵文化財センター環境考古学研究室 アソシエイトフェロー 松崎哲也
 ●2015年5月1日付け
 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室 アソシエイトフェロー 跡見洋祐
 ●2015年7月1日付け
 企画調整部国際遺跡研究室 アソシエイトフェロー 影山悦子
 ●2015年8月1日付け
 都城発掘調査部史料研究室 アソシエイトフェロー 藤間温子
 都城発掘調査部遺構研究室 アソシエイトフェロー 大橋正浩

●2015年8月31日付け
 辞職 高田祐一
 ●2015年9月1日付け
 企画調整部文化財情報研究室研究員 高田祐一
 ●2015年10月1日付け
 飛鳥資料館学芸室 アソシエイトフェロー 小沼美結
 ●2015年12月1日付け
 都城発掘調査部遺構研究室 アソシエイトフェロー 坪井久子
 ●2015年12月31日付け
 任期満了退職 福嶋啓人
 ●2016年3月31日付け
 定年退職 小野健吉
 定年退職 難波洋三
 定年退職 西上康夫
 任期満了退職 井菊直人
 任期満了退職 菊地淑人
 任期満了退職 中川美子
 任期満了退職 中村山聡
 辞職 青木敬
 辞職 中村玲
 辞職(転出) 木村浩二
 辞職(転出) 本光秀
 辞職(転出) 川畑純

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2015年度	2016年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	832,853	760,059
施設整備費	1,555,767	29,514
自己収入（入場料等）	34,983	49,155
計	2,423,603	838,728

土地と建物

単位：㎡

	土地	建物（建面積/延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	現在、建替中	
平城宮跡資料館地区	※	13,328.49/21,394.61	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2016年4月15日現在）

単位：千円

研究種目	2015年度				（参考）2016年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	33,410	－	－	1	33,800	－	－
基盤研究（A）	5	41,508	－	－	4	27,170	－	－
基盤研究（B）	8	23,010	6（6）	7,540	7	17,420	5（5）	4,160
基盤研究（C）	－	－	11	13,346	－	－	12	15,340
挑戦的萌芽研究	－	－	2	3,250	－	－	3	3,250
若手研究（A）	2	1,690	2（2）	3,120	5	13,780	2（2）	2,990
若手研究（B）	－	－	15	11,570	－	－	19	17,680
奨励研究	2	1,100	－	－	1	700	－	－
特別研究員奨励費	1	1,560	－	－	－	－	－	－
研究成果公開促進費（学術図書）	1	1,400	－	－	－	－	－	－
研究成果公開促進費（データベース）	－	－	－	－	1	3,300	－	－
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	－	－	1	－	－	－	1	13,910

※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるもの（一部基金分）の件数はそれぞれに含み、②の括弧書きは共通するもの内数である。

受託調査研究

単位：千円

区分	2014年度		2015年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	28	187,199	22	155,218
発掘	16	46,599	11	71,090
計	44	233,798	33	226,308

研究助成金

単位：千円

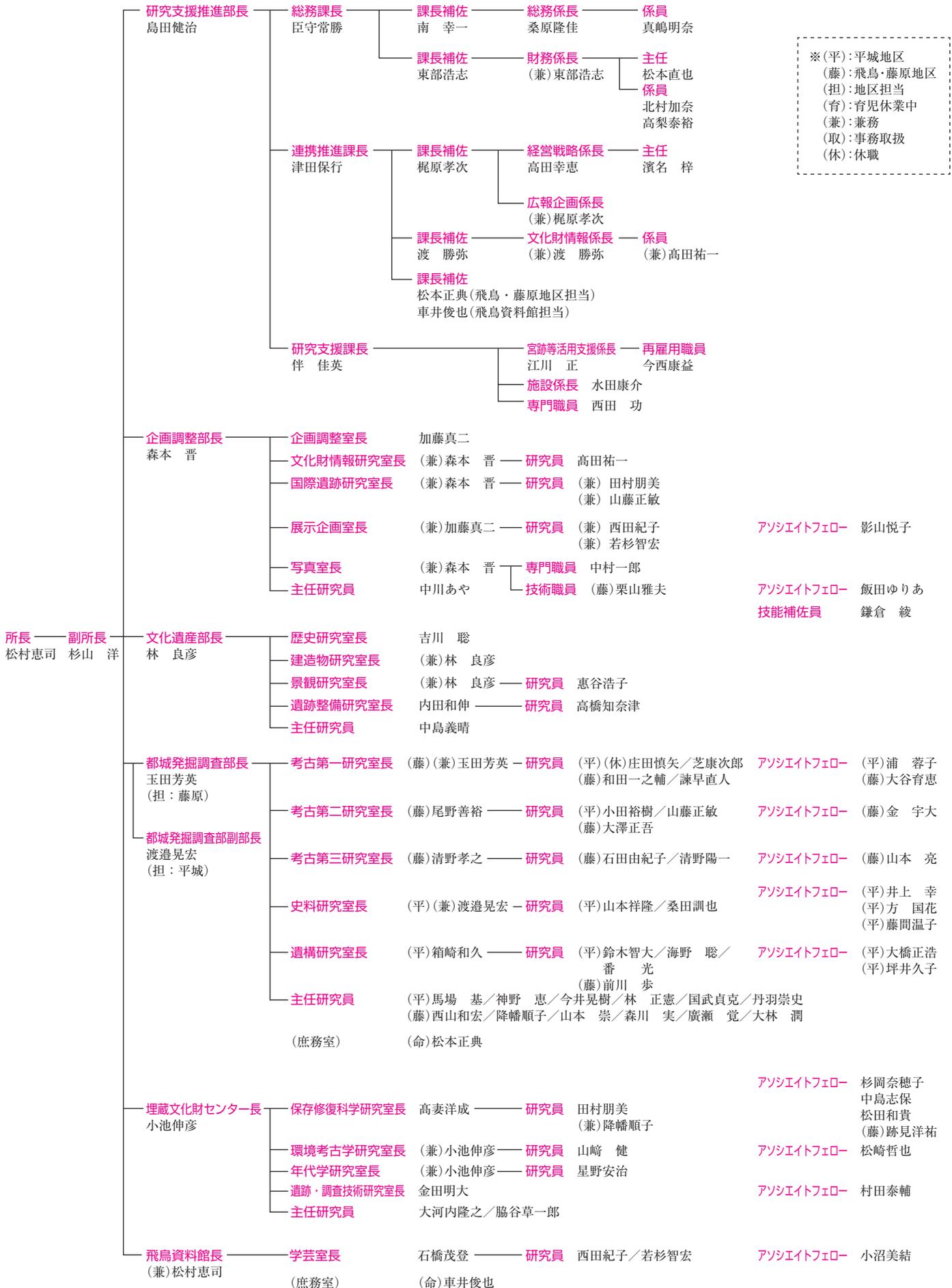
研究助成金	2014年度		2015年度	
	件数	金額	件数	金額
	5	3,984	6	4,350

※採択年による集計

※2ヵ年にわたる場合も初年度に計上

職員一覧

2016年4月1日現在



※(平):平城地区
 (藤):飛鳥・藤原地区
 (担):地区担当
 (育):育児休業中
 (兼):兼務
 (取):事務取扱
 (休):休職